
バカと幼馴染と恋物語？

Tubasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと幼馴染と恋物語？

【Nコード】

N1099P

【作者名】

Tubasa

【あらすじ】

吉井明久の幼馴染とその周りのほのぼのとした学園生活。最終的にオリx明久。

投稿者は理数系な上に初心者でこの作品が処女作になります。

拙い文章や表現になると思いますがご指導やら感想いただけると嬉しいです！

設定 *ちよつと追加

如月 優奈 女性 16歳 3月1日生

セミロングの黒髪、黒色で若干たれ目、身長159cm、胸はC、D程度、性格は基本的に穏やかで明るい

成績は上の中、運動神経はあまりよろしくない。テストの成績は得意教科の物化数で四百点前後、苦手科目の古典や現国は二百点未満で、他は二百点から三百点くらい。

召喚獣の外見は白い侍服のようなものと簡単な鎧、イメージとしては銀魂の銀時が攘夷戦争の時にしていた服装で武器は大太刀

明久や瑞希の幼なじみ。明久とはマンションの隣同士で、小さい頃から家族ぐるみの付き合い。小さい頃に大きな犬に追いかけられたことがあって、大きな動物は苦手

特殊設定

明久が観察処分者になった際に少しでも教師陣の印象を良くするために勉強を頑張を教えて以降、明久も少し真面目に勉強しています。おかげで明久はDクラス並みの成績になっていて、教師陣の印象もそんなに悪くないです。

*感想ページに質問があったので、ちよつと追加です。

バカテストなのですが、真面目に解答しても面白くないので、優奈には作者権限?で変な解答をしてもらってます。

時々、割と本気っぽいのもありますが。

本編には関係ないので、軽く流していただければ幸いです。

第一話 クラス分け

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

「問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例…ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点…ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

「問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応して危険であるということ。」

合金の例：青銅」

教師のコメント

正解です。最近の吉井君の頑張りぶりには目を見張るものがありますね。先生も期待しています。

如月優奈の答え

「合金の例：緋緋色金」

教師のコメント

実在する金属でお願いします。

私、如月優奈が文月学園に入学してから二年目の春

私の通う文月学園は“試験召喚システム”という新技術を試験採用している進学校で今世間で最も注目を集める新設校です。そして今日は新学期、校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っています。

しかしそんな桜を眺めている暇もなく私と私の幼馴染の明久は走っています。

明久「優奈、大丈夫？」

「はあ、はあ、心配するなら、きちんと、起きてきてよ！」

ちなみにこうなった理由は明久が2度寝してしまったため。

明久はまだ余裕があるみたいだけど、私は体力がないためかなりきつい。

西村「遅いぞ、吉井、如月」

玄関の前でもとても低い声に呼び止められました。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男の人が立っていた。

明久「あ、鉄じ、じゃなくて、西村先生。おはようございます」

「ふう、西村先生、おはよう、ございます」

私は息を整えながら挨拶した。

西村「ああ、おはよう如月。それと吉井…今、鉄人って言わなかったか？」

明久「き、気のせいですよ」

「私も聞こえませんでしたよ？」

西村「ん、そうか？」

とぼける明久に私がフォローすると西村先生は首を傾げました。

西村先生は生活指導担当教諭で一部の生徒に恐れられている存在です。

また、鉄人というのは生徒の間での西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンからきてることです。

西村「それにしても、二人とも時間ギリギリだ。次からは注意しろよ」

明久「はい」

「すみませんでした」

西村「それじゃ二人とも、受け取れ」

先生が箱から【吉井明久】、【如月優奈】と大きく書かれた封筒を取り出して私と明久に差し出してきました。

明久「あ、どーもです」

「ありがとうございます」

渡された封筒の中に入っていた紙を開くと、私は『A』、明久は『F』と書かれていました。

昨日、聞いた話によれば明久は熱で途中退席した瑞希に付き添って保健室に行ったため、テストが全て無得点になたそうです。

西村「吉井、あのままテストを受けてそこその結果を出していれば、観察処分について検討してもらおうとしていたんだぞ？」

明久「それでも僕は、姫路さんさんが苦しんでいるのをほっとくことなんて出来ませんでした」

そうキツパリと明久が答えるのを聞いて、私の頬が少し緩んだ

西村「まったく…お前はとんだお人好しだな」

西村先生も少し微笑んで言った。

「私は、そこが明久のいいところだと思いますよ」

西村「そうだな。ほら、さっさと自分達クラスに行け、遅刻ギリギリなんだからな！」

第二話 Aクラス

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

如月優奈の答え

(2) 泣きっ面に犬

教師のコメント

犬に何か恨みでもあるのですか？

「うわぁ」

明久「……なんだろう、このバカでかい教室は」

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、通常の5倍はあろうかという広さを持つ教室が目の前にあった。なかの設備も合わさって、まるで高級ホテルのロビーのようです。

これが噂のAクラスだろうか？ そう思って辺りをみまわすとAクラスと書かれたプレートがあった。

「ここがAクラスみたいだね」

明久「そ、そうなんだ」

隣にいる明久を見てみると、この過剰な設備と広さをもつ教室に驚いているようです。

私もちよくちよく噂を耳にしていたけど、実際見てみると圧倒されます。

試験校ということから県から補助金がでているらしいけど、こんなに
お金かけて大丈夫なのだろうか？

「じゃあ、私は行くから明久も急ぎなさいよ、遅刻ギリギリなんだ

し
明久「うん、それじゃまた」

そう言つて奥に走つていく明久を見送り、私も教室に入った。
中を見渡すと翔子に優子、愛子がいた。残念なことにやつぱり瑞希は居ない。

「おはよう、みんな」

翔子「おはよう」

優子「ん、おはよう」

愛子「おはよう」

三人とも去年以来の友達だ。

「三人ともやつぱり、Aクラスか。そういえば優子、秀吉は何クラスになった？」

優子「Fクラスよ、普段から勉強せずに演劇の練習ばかりしてるんだから。姉として恥ずかしいわ」

彼女は木下優子。校内では模範的な優等生として有名だが、秀吉曰く、家では結構ズボラで常に下着かジャージ姿で生活しているらしいです。あと隠れ腐女子で、始めて家に遊びに行ったときに目にした本の衝撃はいまだに忘れられない。趣味云々はともかく仲のいい友人の一人だ。

そして秀吉は優子の双子の弟で遊びにいたったときに仲良くなった。
一卵性双生児かと思うくらい優子とそっくりで見た目は美少女。

愛子「そうかな？優子の弟って演劇部のホープと言われてたよね？それなら勉強はできなくても恥ずかしくはないんじゃない？」

このベリーショートでボーイッシュな女の子は工藤愛子。1年生の終盤に転校してきたボクっ子で、転校初日に話しかけて以来仲良くなった。他人をからかうのが好きで、たまにセクハラっぽい発言が玉に傷だけど。

翔子「……………」

長い黒髪が印象的な寡黙な美少女は霧島翔子。幼馴染の坂本のことを想い続けている一途な女の子で1年の終盤に坂本のことと相談されて以来の仲。

坂本とは明久を通してそれなりに仲良くなった。

がらっ…

音のする方を見てみると高橋先生が入ってくるどころだった。おそらく先生がこのクラス担任なんでしょう。

「席に戻らくちゃ、じゃ」

そして私たちは自分の席にもどった。

〈明久side〉

雄二「んで話って？」

先生が出て行った後、僕は雄二を連れて廊下で話していたHR中だけあって廊下には人影はない。ここなら安心して話ができそうだ。

「この教室についてなんだけど…」

この教室というのは言うまでもなくFクラスのことだ。

雄二「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、【試召戦争】をやってみない？」

雄二「戦争、だと？」

「うん、しかもBクラス相手に」

雄二「……何が目的だ」

急に雄二の目が細くなる。警戒されてるんだろうか。

「振り分け試験で思うところがあつたよ。 実力だったらともかくとして、姫路さんがこんな酷い教室で学んでいくのはどうなんだろう、て。」

こうして話していると、試験の時に感じた理不尽な処分に対する怒りが沸々と湧いてくる。

「体調管理だつて実力のうちかもしれない。けど、体調不良の早退でいきなりFクラス行きはあんまりだし、もう少しチャンスがあつてもいいんじゃないかって。そう思うと意地でもまともな設備をてにいれたい」

そう言い終わると、雄二は少し納得いかない様子で

雄二「じゃあ、なんでBクラスなんて中途半端なクラスなんだ？そこまで言うならAクラスに試召戦争を仕掛けてもいいと思うけどな」

Aクラスには優奈が居るからなんだけど、この状況で言うのは少し恥ずかしい。

「あー、えーっと、それは……」

雄二「……如月がAクラスにいるからか」

凶星をつかれて思わず、

「どうしてそれを？」

雄二「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐに引っかかる」

雄二の目から警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かぶ。
ハメられた！

「まあ、色々世話になってるから……」

最近では自重しているけど、雄二と一緒に問題を起こした時に一緒に頭を下げて減刑嘆願してくれたり、毎朝起こしにきてくれたりと世話になってばかりだ。

雄二「お前に言われるまでもなく、俺自身試召戦争をやるうと思っ
ていたところだ。お前や如月には悪いがAクラス相手にな」

「え？どうして？雄二は全然勉強や設備に興味なんてないよね？」

僕が不思議に思いつつ質問すると

雄二「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな
な」

「????？」

雄二「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしーおっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

僕は今の言葉を少し不安に思いながらも、雄二に促されるまま、しぶしぶ教室に戻った。

第二話 Aクラス（後書き）

小説はよく読むけど、書いてみるとかなり難しい。

原作からも文章を借りてかいているけどなかなか進まない。

小説を書く人のすごさを実感するきょうこのごろ。

第三話 試召戦争

【第三問】

問 以下の英文を訳しなさい。

『 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly. 』

姫路瑞希の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です。 』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『 これは 』

教師のコメント

訳せたのは This だけですか。

如月優奈の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です。 』
(おばあさんの御冥福をお祈りいたします)

教師のコメント

勝手に殺さないでください。

今日は新学期初日ということでオリエンテーションしかなく、午前で終わりです。

「三人とも昼食はどうする？、私は学食にするつもりんだけど」

愛子「ボクは午後から部活もあるし、学食で食べていくよ」

優子「そうね、家に帰っても何もなし私も学食ですませるわ」

翔子「私もそれで構わない」

「じゃあ、みんなで食べに行こうか」

ところ変わって学食。

愛子「そういえばさ、FクラスがDクラスに宣戦布告したって話なんだけどみんな聞いた？」

「えっ、本当に？」

愛子の話に驚いて聞き返した。まさか新学期早々試召戦争が始まるとは思わなかったから。

愛子「うん、Dクラスの子が言ってたよ。午後から開戦だって、どっちが勝つと思う？」

愛子は少し楽しそうに聞いてきた。

それにしてもこんなにすぐに試召戦争を始めるなんて、よっぽど酷い設備だったのかなFクラス。

優子「今から試召戦争を始めると、振り分け試験の点数が反映するから普通にDクラスが勝つんじゃないかしら」

翔子「でも勝ち目がないのに宣戦布告するとも思えない」

優子はあまり興味がなさそうに、翔子は少し心配そうに言った。
翔子はFクラスにいるらしい、坂本が心配なのだろう

「Fクラスには瑞希がいるから、十分勝ち目がある戦いだと思うよ？」

優子「へ、どうしてFクラスにいるのよ？」

瑞希の成績は上位一桁以内に常に名前を残すほどだから、最下層に位置するFクラスにいるのはおかしいのだけど、

「振り分け試験の最中に高熱で途中退席してしまったんだって」

優子「それはまた運が悪いわね、よりも寄ってその日に体調不良なんて」

全く。文月学園では試験途中での退席や欠席は無得点あつかいになる。

センター試験でも病欠者は追試を受けられるのだからもっと手心加えてくれてよさそうなのに。

優子「じゃあ、Fクラスにも勝ち目はあるんだ」

以外そうに言ってる所をみると優子もFクラスに勝ち目はないと思っただけです。

そうやってだらだら喋りながら昼食を終え、優子は部活へ、優子と翔子は用事があるらしくさっさと家に帰って行った。私は試召競争がきになったので明久に「試召競争が終わったら一緒に帰ろう」と

いうメールをいれて、学園に残ることにした。
それからすることもないので、今後の予習していると、

ピンポンパンポーン『連絡致します』

『船越先生、船越先生』

『吉井明久君が体育館裏で待ってます』

『教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

船越先生といえば婚期を逃して、ついに生徒たちに交際を迫るようになったと噂される先生です。

多分作戦の1つなんだろうけど、明久は大丈夫なんだろうか？
それからしばらくたって明久から試召戦争が終わって帰るところだ
というメールが届いたので、約束していた校門までいくことにした。

それから校門で待っていると、

明久「優奈、遅くなってごめん。」

そうやって明久が少し駆け足でやってきた。

「別に構わないわよ、少し遅かったけど何かあったの？」

明久「うん、教室まで忘れ物を取りに行ってた」

「そっか。じゃあ帰ろうよ、今日のことを色々聞きたいし。」

そう言ってお互いにあるきだした。

「そ、そうなんだ」

明久からFクラスについて聞いたところこれ以上ない位にひどい設備みたいです。

これじゃあすぐに試験戦争始めるのも仕方ない気がする。

「じゃ、じゃあ、今日の試召戦争の結果はどうだったの？勝てたなら大分ましな設備になるよね」

明久「姫路さんと雄二の作戦のおかげ勝てたけど、雄二が設備の入れ替えはしないって」

どういう事なのだろう？設備の入れ替えをしないなんて、それじゃ試召戦争を仕掛けた意味がない。

そう思っていると明久が何処となくもうしわけなさそうに、

明久「雄二は目標はAクラスの打倒で、Dクラスとの戦争はあくまでその過程にすぎないんだって」

さすがに予想もしなかった答えに驚いた。

さすがにそこまで点数差を覆すの不可能なんじゃないだろうか？

「いくらなんでもそれは無茶な気がするけど……」

明久「雄二には何か秘策があるみたいだよ」

そう言いつつも明久は複雑な表情だ。

「明久はあんまり乗り気じゃなさそうだね？」

明久「負けたらさらに設備が悪くなるし、勝てば設備はすごく良くなるけど、そうすると優奈がああ教室で授業を受けることになるんだよ？僕はどっちも嫌だし」

確かに私も明久や瑞希にその教室いてほしくない。

「そんなに難しく考えなくても、明久はFクラスの一員として、私はAクラスの一員として全力を出し合えばいいと思うよ。それに負けても3ヶ月我慢すればいいんだし明久が気にする必要はないよ」
明久「それもそうだね。考えても変わらないわけだし、Fクラスの一員として全力で戦うことにするよ」

明久はさっきより幾分すつきりした感じだ。

「そうそう、私もそうしてくれたほうが遠慮しなくていいしね。それじゃはやく帰ろうあんまりゆっくりしていると暗くなるよ?」

第三話 試召戦争（後書き）

試召戦争間、他のクラスはなにをしてるかわからなかったのだから、
いう形にしたのですがどうだったでしょう。感想、評価などあればお願いします。

第四話 クラス代表

問 下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

「光りは波であって、（ ）である」

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

如月優奈の答え

『目にしみるの』

教師のコメント

寝不足ですか？体調には気をつけてくださいね。

（ AM 7 : 30 ）

今は明久たちがDクラスとの試召戦争を終えてから二日目の朝だ。
噂だと、昨日FクラスはBクラスに宣戦布告したらしいけど、どう

なつたのだろうか？

そう思いながら、私は明久の部屋のチャイムをならす。

ピンポン

しばらく待つが返事がない、まだ寝てるみたい。

しかたないので、いつもどおり合い鍵を使って入る。

何故、私が明久の部屋の合い鍵を持っているかというところ、明久の両親からわたされたからだ。

何故か詳しく教えてくれないのだが、明久の両親と父さんは経営コンサルタントしているらしい。

それで去年、仕事関係で三人とも海外に行くことになり、母さんも父さんについていくことになったので、私たちは一人暮らしになった。

その際に、明久の両親から「明久に一人暮らしさせるのは心配だから、ときどき様子をみてくれないか」と頼まれて、いいですよと答えたらこの鍵を渡された。

多少は予測していたのだけど、明久は始めあつという間に仕送りを使い果たしたり、寝坊したりとひどかったので、こうして私が毎日起こしに来ている。

「明久ー！、明久ー！」

と言いつつ、ベッドで寝ている明久を揺する。

「うーん、あと5分」

とベタな返事が明久から返ってきた。

今回は少し手ごわい、大抵は揺すれば起きるのに。仕方ないので、今度は布団をひっぺがす。

「うっ」

明久の目がゆっくり開く。どうやら、起きたようだ。

「おはよう、目が覚めた？」

「あ、ゆうな？おはよう。」

「また二度寝しないで、きちんと起きてよ？」

「りょうかい」

明久はまだ眠たそうに、しながら答えてきた。

それを聞いて、大丈夫？と思いながらも私は部屋をでた。

ちよつど朝食の準備が終わったところに、明久がリビングに入って来た。やっぱり、一緒に食事した方が楽しいので、私は普段明久の家の方で朝食をとってる。

「ちよつど朝食できたところだから早く食べよう」

「うん」

と明久はまだ眠たそうに言いながら席についた。

「明久、眠たそうだけどどうしたの？」

食事中、私はトーストをかじりながら疑問に思ったことを明久に聞いてみた。

ちなみに朝食は、トーストと目玉焼きと昨晚の残りのサラダだ。

「もぐもぐ……、昨日、一昨日と試召戦争のために勉強してて寝るのが少し遅くなってさ」

明久は少し疲れたかんじでそう言った。

どうやら、真面目に勉強しているみたいだ。

1年の時に勉強を教えた身として、嬉しく思いながら、今朝聞こうと思った試召戦争ことをきいてみた。

「そっか頑張ってるんだ、そういえばBクラスとの戦争はどうなったの？」

「昨日決着がつかなかったから、今日の九時まで停戦でことになったよ」

と明久は何か嫌なことでも思い出したような顔をして言った。

Bクラスと何かあったのだろうか、と少し心配して聞いてみると

「Bクラスと何かあったの？」

「実は……」

そのあと昨日の戦争の話聞きながら食事を終えて、いつも通り学校へ登校した。

明久の話を聞いて、Bクラスを相手にするときには気をつけよう心に留めつつ、瑞希が元気そうで安心した。

そして、その日の一限目の休み時間。

「私たちCクラスは、Aクラスに午後から試験召喚戦争を申し込みます！」

Cクラス代表の小山友香と名乗る女子がいきなり優子に面と向かって宣戦布告してきた。

しかも何か怒ってるのか、優子を親の敵といわんばかりに睨んでいる。

「えっ、ええ、わかったわ」

優子は戸惑いながらもこの宣戦布告を受け入れた。

私たち上位クラスは下位クラスの宣戦布告を断る事は出来ない。

普通上位クラスは試召戦争によるメリットが全く無いため、下位クラスからの宣戦布告に対して腹をたてるらしいけど、今のAクラスは彼女の気迫？にのまれてたじたじだ。

そして優子を睨みつけたまま小山さんは

「今朝、さんざん私たちをブタ呼ばわりしたことを後悔させてやるんだから！」

と凄まじい発言を残して去って行った。

じ〜

みんなの視線が私の隣にいる優子に集中する。

「ゆ、優子、謝りにいった方がいいんじゃないかな？」

私は少し引きながらもそう言った。

一体、優子になにがあったんだろう？

「ちょ、私はそんなこと言ってないわよ」

優子は周りの視線にたじろぎながらも、否定している。
そこに愛子が、

「え〜と、優子とは通学路で会ってから一緒にいるし、何かの間違
いじゃない？」

と発言した。

それならどうして、小山さんはあんなに怒ってたんだろう。

「じゃあ、Cクラス代表の言ったことは？」

誰かがポツリとつぶやいた。

クラスメイト達も何がどうなっているんだと言う感じた。

私もわからないことだらけだが、とりあえず置いといて、

「ねえ、悩んでも仕方がないし、試召戦争の準備をするべきじゃな
いかな？」

そう言うと、クラスのみんなも賛同してくれて、みんなで試召戦争
の準備をはじめた。

いくら下位クラスだからと言って、油断していたら負けるかも知れないし、今からでも準備は整えておくべきだと思う。それにあれだけ怒ってたら、話し合いはできないだろうし。

AクラスとCクラスの試召戦争の結果は私たちの勝利で終わった。点数差があつて苦労せずに勝てたが、誤解はそのままだ。ほとぼりが冷めるまで、あまりCクラスに近づかないほうがいいかもしれない。そう考えながら、教室にもどると

「Bクラス代表根本恭二だAクラス代表と話がしたい」

何故か女装したBクラス代表がやって来た。

こついう時、どんな顔をすればいいんだろう？

第四話 クラス代表（後書き）

どうだったでしょうか。

感想、評価などあればお願いします。

第五話 交渉

問 以下の問いに答えなさい。

「good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞樹の答え

『good better best
bad worse worst』

教師のコメント
その通りです。

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『おっぱい』

如月優奈の答え

『good - very good - very very
good』

教師のコメント

違います。というより、あなたは英語をなめていませんか。

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

女装趣味のBクラス代表が訪問してきてから三日、Fクラス代表の坂本を筆頭に明久、瑞希、秀吉に土屋君がAクラスに宣戦布告にきた。

「うーん、何がねらいなの？」

坂本と交渉のテーブルについている優子が訝しみながら訊いた。確かに、学年トップの翔子にわざわざ一騎討ちを挑むなんて不自然だ。

何か裏があるのだろうか。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

坂本は当然と言う感じでそう答えると。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

坂本は腕を組んで、顎に手をあてながら唐突にそんなことを訊いてきた。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？なんの問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

優子は突然なにを？というふうに答えると、今度はこう訊いてきた。

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表ををやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだ、さてさて。どうなることやら」

優子は心底嫌そうな顔だ。

この前の事を思い出してるんだろう。

私も忘れたいのだけど、あまりのインパクトに忘れられない。

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

優子は誤魔化すように少し早口になりながらそう訊いた。

試召戦争の決まりの一つで、敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を取らない限り自ら宣戦布告できない。

ちなみBクラス代表が訪ねて来た時はあまりの姿に唾然として、誰もこのことを訊くことができなかった。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約にはなんの問題もない。…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

どうやら、交渉が決裂した時はBクラスとDクラスに攻め込ませるつもりようだ。

確かに連戦になれば私達Aクラスも危ない。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

いや、誰がどう聞いても脅迫にしかきこえないよ。

後ろの明久達も、坂本の悪役じみた交渉の仕方に若干引いてるし。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「ちよと、優子!？」

あまりにあっさりとした返事に驚いて、後ろにいた私は声を上げてしまった。

坂本は一騎打ちの方に何かしら勝算があるから、こうして交渉しに来ているはずだし、連戦はつらいけど、わざわざ相手の思惑にのることもない。

優子もわかっているはずだ。

「優奈だつて、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌でしょ?」

「……そうだね」

優子の言葉におもわず頷いてしまった。

クラス代表はある意味クラスの顔だ。

Bクラスの人達には悪いけど、あの代表のいるクラスに良いイメージをもてない。

それに戦争中に女装した代表にまた会ったら精神的なダメージも大きそうだし。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな」

さすが優子、軽く向こうの提案を受け入れたように見えて、しっかりと警戒している。

「うん。多分大丈夫だとおもっけど、代表の調子が悪かったら問題次第では万が一があるかもしれないし」
「わかった。その条件を呑んでも良い」

坂本は意外にあっさりこの提案を受け入れた。

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズレはあってもいいはずだ」

「え？うーん……」

なるほど、こっちの提案がそのまま受け入れられたとなると、今の提案をつっぱねにくい。
どうしようかと思っていると。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久が少し情けない声を上げる。

私達も静かで凜とした声のする方を見てみると。

「……雄二の提案を受けてもいい」

いつの間にかFクラスメンバーの近くに現れた翔子が坂本の提案をうけいれていた。

というか翔子、たまに気配を断って声かけるのは止めてほしい。心臓に悪いし。

「あれ？代表。いいの？」

「・・・その代わり、条件がある」

「条件？」

「・・・うん」

うなずいて、翔子は坂本を見た後に瑞希を値踏みするかのようにつくりと観察した。

坂本の近くにいる異性が気になるのかな？翔子と話すきっかけになった時もこんな感じだったし。

そして、翔子は顔を坂本に向けて言い放つ。

「負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

うん、これはこの約束を盾に坂本と交際を迫る気かな？

ちよっと強引な気はするけどあの二人は少しすれ違ってる感じがあ
るし、これでいいのかもしれない。

「・・・（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満
々じゃないか！」

そして明久はいったい何を騒いでるんだろうか？というより、撮影
と勝敗になんの因果が？

「じゃ、どうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせて
あげる。二つはうちで決めさせて？」

優子から妥協案がでてきた。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

明久は瑞希を心配しているみたいだけど、何故瑞希だけ？負けた方は何でも一つ言うことを聞くという話ならFクラス全体の問題だと思うけど？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑をかけない」

翔子の狙いは坂本だからね。

「・・・勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでもいいか？」

「・・・わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね皆にも報告しなくちゃいけないからね」

そう言って、明久達はAクラスをあとにする。

明久達との試召戦争は、すぐそこまでせまっていた。

第五話 交渉（後書き）

どうだったでしょうか。

感想、評価などあればお願いします。

第六話 V S F クラス

問 以下の問いに答えなさい。

「女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

如月優奈の答え

『初恋』

教師のコメント

先生もこういう答えは好きです。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

「では、両名共準備は良いですか？」

一騎打ちの会場はAクラス。

Aクラス担任兼学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ」

「・・・問題ない」

翔子と坂本の両代表の言葉を合図に試召戦争は開戦した。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Aクラスのトップバッターは優子。対するFクラスは、

「ワシがやるっ」

その弟の秀吉、姉弟対決だ。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

確かCクラスの小山さんって、この間優子に豚呼ばわりされたと怒ってる人だったはずだ。

「じゃーいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる?」
「うん?ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

妙に笑顔の優子が秀吉を連れてAクラスを出て行く。

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら?どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ?』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上!ちがっ・・・!その関節はそっちには曲がらなっ・・・!』

今もれてきた会話から察するに、小山さんを罵倒したのは優子ではなく変装した秀吉だったみたい。

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。もしかして、今拭っている赤いものは返り血?

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくる?」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

この状態でにこやかに笑いかける優子に、さすがの坂本もなにも言えないみたい。

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイ

レイに結果が表示された。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 WIN
DEAD』

先生、多分まだ生きてます。というか前も秀吉は何とか生きてました。

「では、次の方どうぞ」

「じゃあ、私が出ます」

そう言つて、私は前に出た。

事前の話で、この戦争は私、優子、翔子、愛子、久保君が出ることになってる。

「そういえば優子、さっきの戦いでどっちが科目選択権を使ったの？」

さっきの戦いで疑問に思ったことを優子に聞いてみる。

「うーん、こっちが使ったことでもいいよ」

すると優子は少しばつが悪そうにそう言った。

優子の折檻で教室全体の空気が微妙になったし、居心地が悪いのかもしれない。

科目選択権があと1つだけとなると使いにくいし、相手の出方を見るべきかなと考えていると

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

自信たつぷりの雄二と戸惑いを隠せない明久の声が聞こえた。

「わかった、行ってくるよ。……先生、科目は古典をお願いします」

明久は少し躊躇ったけど、そう言って前に出てきた。

私は前に、私は気にしないからAクラスと戦うことになったら全力をだしてくれればいい、と明久に言ったけど、こんな形で戦うことになるとは思わなかった。

正直、明久の召喚獣はフィードバックがあるから殴りにくい。

「優奈、前言ってくれた様に僕は全力を出すから、優奈もフィードバックを気にせず全力できてよ」

明久は私が躊躇しているのに気がついたのか、そう言ってくれた。向こうは私の苦手科目を選択してきたから、本気で勝ちにくるつもりみたい。

「そうね、私も全力で行くから、後悔しないでね？」

敵同士だけど、明久なりに気を使ってくれたことを嬉しく感じつつ、私はそう言った。

すると高橋先生の準備が終わったようで合図がでた。

「それでは召喚を開始してください」

「「「??? 試獣^{サモ}召喚！」」」

□ Aクラス 如月優奈 VS Fクラス 吉井明久

古典 222点 VS 119点

』

「え、いつもより点数が高い」

「今回、苦手科目に力入れてたし、古典の出来も良かったから」

私は驚く明久にそう言って召喚獣を突撃させる。

すると明久は振り下ろされる刀にたいして、横から木刀をぶつけて受け流した。

そして少し体勢の崩れた私の召喚獣に木刀を打ち込む、私はそれを回避しようとするけど左肩にあたってしまふ。

でも大したダメージじゃないみたいだから、そのまま強引に右手だけで刀を振り下ろす、明久は体をそらして回避し、そのまま一回転してなぎ払ってくる。

だけど何とか刀で受け止めることができ、点数差に物を言わせて押し切る。

明久はとっさに受け流して距離をとる。私も体勢を崩したため距離をとって互いに仕切り直す。

『おお〜』

どこかで感嘆の声があがる。

召喚獣の操作は難しく、みんなはまだ慣れていないから、このんな複雑な操作ができないからだろう。

明久は観察処分者で雑用として召喚獣を操る機会が多いから、ここまで細かい操作できるみたい。

教師も忙しいらしく、基本的に明久が雑用をしている間はどこかに言ってるから、私は可能な範囲で手伝ったり、横で召喚獣を操作していて、明久ほどではないけど慣れてる。

『Aクラス

如月優奈

VS

Fクラス

吉井明久

□

さっきの一撃で修正がはいった。まだ何とかなると思っけど、さらに削られていくと勝ち目が薄くなる。

そう思いながら互いに距離をじりじりと詰めていく。

そして私はまっすぐ突きを放つけど、すぐ横にとんでかわされる。

そこで私は刀の向きを変えて思いつき横になぎ払う、大太刀なので普通の刀より範囲が広い。

「なんの！」

それを明久は屈んで避け、そのまま向かってくる。

だけどそれは予想済みのため、おもいつきり下から上への蹴りを放つ。

「そこ！」

「たこす！」

さすがの明久も避けられず木刀で受け止めるけど、力の差は歴然としていて、そのまま蹴り飛ばされる。

フィードバックによるダメージがあっただけだけど、すぐに体勢を立て直したから大丈夫みたいだ。

召喚獣の操作は難しく、私はここまで動かすのにかなり集中力を必要としている。

集中力が続く間に一気に勝負をつけたい。

そう思って私はもう一度召喚獣を突撃させる。

明久は何とか回避し、攻撃を加えてくるが、痛みのせいか少し動きが鈍い気がする。

そこで私は防御は全て鎧にまかせ、そのまま攻撃する。

明久は攻撃して動けない所に、攻撃がきたためそのまま直撃する。

▣ Aクラス 如月優奈 VS Fクラス 吉井明久
古典 44点 VS 0点

▣

これでこの戦いの帰趨は決した。

第六話 VS Fクラス（後書き）

初めて戦闘シーンを書いたのですが、どうだったでしょうか。おかしな所があったら、教えてください。

また、感想、評価、アドバイスなどもあればよろしくお願い致します。

第七話 終戦

問 以下の問いに答えなさい。

「人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい」

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

如月優奈の答え

『？空気 ？火 ？土 ？水 ？エーテル』

教師のコメント

それは五大栄養素ではなくヨーロッパの五大元素です

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい・・・』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

「うっ……」

明久がフィードバックの痛みで唸っている。
ダメージの一部だけでも、肩からばっさり斬られたのは痛かったみたいだ。
少し痛がつてる所や疲れている所しか見たことないから、さすがに心配になる。

「明久、大丈夫？」

「……なんとか」

そう言つて立ち上がる所を見て安堵していると、坂本が驚いた様に呟いた。

「まさか明久がここまでいい勝負をするなんてな」

「ちよつと待つた雄二！あそこで自信たっぷり僕を名指しして、全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

あいかわらず明久の扱いが酷い。

たまにこの二人はなんで友人をやつてるのかわからない時があるけど、いつも行動を共にしている所を見ると、何だかんだで馬が合うのかな？

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

Fクラスから土屋君が出てきたので、こちらからは愛子が出た。

土屋君がBクラスの代表を倒したことは保険体育の成績を含め既に知れ渡つてる。

だから向こうは保健体育を指定してくると想像できるから、保健体育の得意な愛子が出ることが決まっていた。

「教科は何にしますか？」

「………保健体育」

やっぱり保健体育を選択してきた。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？ボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って実技で、ね」

愛子は自信満々にそう言うけど、そんな公衆の面前で堂々と言うことでもない気がする。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ 勿論実技で」

明久がときめいていたのがわかったのか、前に私の話を聞いて興味をもったのかわからないけど、楽しそうに明久を指名する。

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「それに明久の部屋にはそう言った本が結構あるから、勉強の必要はないよ！」

明久が頷きそうになって、つい瑞希や島田さんと一緒になって愛子に反論してしまった。

明久が愛子に教わくことを不愉快に感じるは何でだろう？

「ちょっと！なんで優奈が知ってるの!？」

「あ……」

思考の海に沈んでいると、明久の焦った声が聞こえて我に返った。つい言っちゃたけど、冷静になってみるとすごく恥ずかしい。

「ごめん……。部屋に遊びに行った時に見つけちゃった」

私は明久に顔をそむけつつ質問に答えた。

何か月前に遊びに行った時に、「漫画とかだとベットの下面によく隠してあるな」と思って面白半分で覗いてみると本当にあって驚いた。

巨乳のお姉さんが多かったから、明久は大きい方が好きなんだろうか？

明久も気づいて欲しくなかっただろうから、本は黙って元にもどしておいた。

「アキ、その話詳しく聞かせてもらえないかしら」

「そうですね、私もすごく興味があります」

「み、美波に姫路さんまで!」

そして明久は何故か瑞希と島田さんに詰め寄られていた。

私が元凶なのだから何とかするべきなんだろうけど、私もどうすればいいのかわからない。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っ」と

「………試獣召喚」

そうしていると、高橋先生の合図で試召戦争が再開された。詰め寄っていた二人や他の生徒も試召戦争の方に注目しだした。

「なんだあの巨大な斧は!？」

Fクラスから驚愕の声が上がる。

小太刀二本の土屋君に対して愛子は巨大な斧で見るからに強そうだ。

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ」

愛子が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして豪腕で雷光のまとった斧を振るう。

「ムツツリーニっ!」

「………加速」

明久の悲鳴が響く中、今にも両断されそうな土屋君の腕輪が光って、彼の召喚獣の姿がブレた。

「………え？」

愛子の戸惑った声。私にも状況がわからない。

いつの間にか彼の召喚獣は愛子の召喚獣の後方にいる。

「………加速、終了」

ボソリと、土屋君が呟く。

そして一拍置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

『 Aクラス	工藤愛子	VS	Fクラス	土屋康太
保健体育	446点	VS	572点	

』

572点て……、学年主席の翔子だって得意科目でも500点ちよつとなのに。」

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」

愛子が床に膝をつく。

自信のある得意科目でここまで大差をつけられたのだから、相当シヨックみたい。」

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めてる。

多分、FクラスがAクラスに勝つなんて夢にも思っていないからだろう。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

ここで瑞希が出てきた。

振り分け試験は途中退出してしまったけど、本来は学年二位の実力者だ。

「それなら僕が相手をしよう」

対するこちらは久保君。

瑞希に次ぐ学年三位の実力の持ち主だ。

二人の実力はほぼ互角で、総合科目の点差にして20点程度。どっちが勝ってもおかしくない状況だ。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

高橋先生に久保君はそう答えた。

「それでは・・・」

高橋先生が前と同じように操作を行う。

そしてそれぞれの召喚獣が呼び出され

すぐに決着がついた。

□ Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S	4229点	

『

』マ、マジか!？」

『いつの間にこんな実力を!？』

所々で驚きの声があがる。

す、すごい。いつの間にこれだけ点数を伸ばしたんだろうか!？

「ぐっ・・・! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・

・?」

久保君が悔しそうに瑞希に尋ねる。

最近まで拮抗していた実力が短期間でここまで離されたんだから、

そう思うんだろう。

「・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

そうなんだ。

確かに明久は瑞希のために試召戦争を始めたいと思ったそうだし、他のクラスメイトも誰かの為に一生懸命になってるのかもしれない。

「これで二対二です」

高橋先生の表情に若干の変化が見られる。

瑞希の成長に驚いてるのかな？

「最後の一人、どうぞ」

「・・・はい」

「俺の出番だな」

こちらからは翔子、Fクラスからは坂本が出てくる。

「教科はどうしますか？」

翔子が負けるわけがないと思ってるから、Aクラスは静かなものだ。ただど坂本は初めから翔子と戦うつもりだったから、何かしら策を練ってきているはずだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限あり

だ！」

ざわ・・・！

そこで、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』
『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が退出する。

教育熱心な先生だから小学生レベルのテストも持っているのかもしれない。

これならFクラスにも勝機があるけど、翔子ならほとんど集中しなくても小学生レベルのテストくらい満点をとれるはずだ。

そうなると坂本の方が不利だけど、他にも何か考えがあるのかな？

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻って来た高橋先生がクラス代表二人にこえをかける。

これでいよいよ決着がつく。

「皆さんはモニターを見てください」

すると、壁のディスプレイには視聴覚室の様子が映し出された。そして翔子先に席に着き、坂本が席に着く。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『・・・はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされる。しばらくすると明久が声を上げる。

「よし!これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに!』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!」

『うおおおおっ!』

教室を揺るがすような歓喜の声があがる。

やっぱり、他にも策があったみたいだ。

もしかして負けたかな、と思っていると結果がでた。

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

Aクラス 霧島翔子 97点

V S

Fクラス 坂本雄二 53点』

最後の結果に釈然としないものを感じながら、AクラスVS Fクラスの試召戦争は終わった。

第七話 終戦（後書き）

自分では少し展開が強引だったかなと思う所があるのですが、どうだったでしょうか。

感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第八話 提案

以下の（ ）に当てはまる歴史上の人物を答えなさい

『 楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（ ）である』

姫路瑞希の答え

『 織田信長』

教師のコメント

正解です。

島田美波の答え

『 ちゃんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この回答を見て先生は少し不安になりました。

如月優奈の答え

『 徳川田信秀』

教師のコメント

誰ですかそのミックス大名は。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ明久達にたいする高橋先生の締め台詞。

私も明久達に話があるから、明久達の後ろからついてきた。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく坂本に翔子が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「そうよ、アキ！」

怒り心頭の明久が瑞希と島田さんに取り押さえられる。

「だいたい、53点って何だよ！0点なら名前の書き忘れも考えられるのに、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

もうちょっとで勝てたのにこんな負け方をしたんだから、明久が怒るのも無理はないと思う。

「くっ、なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

瑞希と島田さんに引き留められ明久はなんとか引き下がる。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

翔子が坂本をフォローする。
とりあえず、みんな落ち着いたみたいだから、私はみんなに話しかける。

「話があるんだけど、ちょっといいかな？」

そう言うともみんな首をかしげながらこっちを向く。

「Aクラスで、こちらの条件をのんでくれたら戦争は和平交渉で終結、と言う事にしてもいいって話しになってるの」

「条件？」

力なく坂本が訊き返してくる。

「何でも一つ言うことを聞くことと、三ヶ月間、他のクラスへ宣戦布告しないこと」

「それだけか？それじゃAクラスになんのメリットもないぞ？」

坂本は訝しげにそう訊いてきた。

「うん。そもそもAクラスが勝つてもFクラスの設備が1段階下がるだけで、Aクラスになんのメリットもないしね。何度も面倒な試召戦争を仕掛けられなければいい、というのがAクラスの意見だから」

試召戦争が始まる前の作戦会議で「Fクラスに友人がいるから、Aクラスが勝つたら戦後対談で引き分けてことにできないかな」と提案すると上の理由で条件が付いたけど、あっさり通った。

多分、Fクラスの設備に対する同情と、自分達が負けるはずないっ

て気持ちを持つてる人が多かったことも理由だろうけど。ついでにこの時、基本的に無口で交渉に向かない翔子の代わりに、提案した私が交渉役をすることになった。

「わかった、そちらの条件をのもう」

「じゃあ、ここにいる高橋先生が証人ってことでいいかな？先生、いいですよね？」

「はい、私は構いません」

「俺もいいぞ」

坂本は一度明久の方を見て納得いったというふうに頷き、こちらの条件をのんだ。

高橋先生も証人になることを快諾してくれてよかった。

「……………ということで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

翔子が坂本にそう言うと、明久と土屋君が撮影の準備を始めた。交渉の時もそうだけど何故撮影をする必要がある？というか明久、その反射板はどこから持ってきたのよ。

「わっかている。何でも言え」

「……………それじゃ……………」

翔子が瑞希に一度視線を送り、再び坂本にもどす。そして、小さく息を吸って、

「……………雄二、私と付き合って」

と、少し恥ずかしそうにしながら言った。

『…………え?』

明久達が面食らったような声をあげる。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか?」

「…………私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「拒否権は?」

「…………ない。約束だから、今からデートに行く」

「ぐあつ! 離せ! やっぱこの約束はなかった事に…………」

翔子は坂本の首根っこを掴み、視聴覚室を出て行った。

「ねえ優奈、霧島さんは雄二の事が好なの?」

しばらく呆然としていた明久が確認する様に訊いてきた。

「そうよ。だいぶ前から坂本の事を好きだったみたい」

「それじゃあ、霧島さんが姫路さんの事をみてたのは?」

「え?坂本の近くにいる異性が気になったからだと思っけど?」

「さて、Fクラスの皆、お遊びの時間は終わりだ」

明久と話していると、私たちの耳に野太いこえがかかる。

音のした方を見やると、そこには西村先生が立っていた。

「あれ? 西村先生。僕らに何か用ですか?」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

事実上負けたせいで、明久達に補習が追加されるみたいだ。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!?!』

明久達が悲鳴を上げる。

そっか、だから”我が”Fクラスって言ったんだ。

西村先生は『鬼』の二つの名を持つほど厳しい教育をする先生らしいから、明久達も嫌なんだろう。

私もできれば遠慮したいし。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに誰も何も言えないみたいだ。

実際、坂本がある程度勉強していれば、明久達が勝ってただろしね。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるろう」

西村先生がそう言うと、明久達は嫌そうな顔をする。

そんな重苦しい空気の中、島田さんが明久にスツと歩み寄りよってこう言った。

「さあ、アキ。補習は明日みたいだし、今日は約束通りクレイプでも食べに行きましょうか?」

「え?美波、それは週末って話じゃ……」

明久が少し戸惑った声を上げる。
二人はいつの間に仲良くなったんだろうか？
よく聞くと名前と愛称で呼び合ってるし。

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」
「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

そう思っていると、今度は瑞希が明久を映画にさそいだした。

「明久！久しぶりにどこか遊びに行こうよ！」
「優奈まで！」

私は見てられなくなって慌てて強引に明久を遊びにさそった。
さつきから感じるこの不快感や羨望感は何だろうか？

「ほら、早くクレープ食べにいくわよ！」
「わ、私と映画に行くんですよね！」
「もういつその事、みんなで遊びにいこうよ！」
「え、え、三人とも！？」

瑞希、明久と三人一緒に遊びに行くのは小学校以来だから、何故か
釈然としない気持ちもあるけど楽しみだ。
そう思いながら三人で戸惑う明久を引っ張っていく。

第八話 提案（後書き）

Fクラス戦はこんな形にしてみたのですが、どうだったでしょうか。感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第九話 デート(前書き)

今回は明久視点です。

第九話 デート

文月新聞

「僕が小さなころ、祖父がよくこう言っていました。

“ 明久。泥棒でも何でも良い、一番を目指して精進しなさい”

今、僕は天国にいる祖父にこの事を教えてあげたいと思います。
じいちゃん……これで、良いかい？」

以上

『 女装が似合いそうな男子生徒ランキング1位』

『 モテそうな男子（同性愛編）ランキング1位』

の2冠を達成した、吉井明久さんのコメントでした。

*尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

ちなみに、吉井明久さんの幼馴染だというY・KさんとM・Hさん、クラスメイトのM・Sさんのコメント

Y・K「ごめん、明久。私もこのランキングをみて納得しちゃった」

M・H「吉井君ならきつと可愛くなると思います」

M・S「そうね。機会があれば可愛い服を着てほしいわね」

「美波は去年日本に帰って来たばかりなんだ？」

「帰ってきた時は大変じゃなかったですか？」

「まあね。読み書きだけじゃなくて言葉もうまくなかったしね」

僕は、優奈、姫路さん、美波と一緒に映画館に向かっている。

優奈も美波も仲良くなったみたいで、姫路さんも交え談笑してる。

優奈は自分だけAクラスになったことで、姫路さんに少し後ろめたさを感じてたようだったけど、もう大丈夫みたいだ。

まあ、姫路さんも気にしてないだろうしね。

でも女の子同士の会話って少し独特な感じがして、ついていきにくい。

会話に参加できない僕は、今月の家計について考えてたりする。

一人暮らしを始めたころのように貧窮してないけど、今でも結構ギリギリの生活を送ってる。

このままだと、月末の夕食のおかずが一品、二品減るかもしれない。でもまあよ、暗いことばかり考えてたけど、女の子と一緒に映画に行ったり、クレープ食べたりするのって、デートなんじゃないだろうか。

いや……、それはないか。

僕に対する美波の普段の扱いや、姫路さんのラブレターの事を思い出して落ち込む。

優奈も友達と遊びに行く感覚で、デートだと思ってないだろうし。

そう考えて落ち込んでいると、映画館についた。

「学割とはいえチケット1枚1000円！」

「コーラMサイズ300円！！」

「ポップコーンSサイズ400円！！！」

「これがたったの二時間で消費されるのか。映画館、なんて恐ろしい所なんだ」

映画館に入ってそれらの値段の高さに戦慄した。
チケットはまだしも、コーラとポップコーンはぼったくりではない
だろうか。

「吉井君」

「な、何？姫路さん？」

姫路さん声が聞こえたのでゆっくりそちらを振り向くと。

「これ、見ませんか」

「へえ、いいんじゃない？これにしようよアキ、優奈」

「うん、私もいいと思うよ」

「そ、そうだね」

楽しそうな姫路さんが映画のパンフレットを指す。

タイトルから察するに恋愛ものかな？

僕は普段映画なんて見ないけど、女の子はこっというのが好きなんだ
ろうか？

美波も優奈も楽しそうにしてるし。

「じゃあさつさとチケットを買いに行こうよ、そろそろ上映時間だ
し」

「そうね、行きましょ」

「あ、待ってください」

楽しそうな三人に受付まで引っ張られる。
が、その途中で、聞き覚えのある声がする。

「よう、明久。お前も来てたのか」

「ゆ、雄二？」

声のした方を見ると、そこには霧島さんに手枷で繋がれた雄二がいた。

どういう、リアクションをすればいいんだろう？

「……雄二、どれがみたい？」

「早く自由になりたい」

「じゃあ、地獄の黙示録・完全版」

と、雄二の言い分を無視して、映画のパンフレットを指差した。

「おい待て！ それ3時間24分もあるぞ！？」

「2回見る」

「1日の授業より長いじゃねえか！！」

「授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

「翔子、埋め合わせの方法を間違ってる？」

言い分を完全に無視された雄二はいきり立つが、霧島さんは歯牙にもかけてないようだ。

横にいる優奈が霧島さんの行動に対して疑問を呟くけど、どうせなら霧島さんに聞こえる様に言っただけかと思っただけだ。

「やっぱり帰る」

雄二は怒って手枷をしたまま、そそくさと出口へと向かう。ただ、霧島さんがふところからスタンガンを取り出す。

「今日は、帰さない」

そう言うと同時に映画館に悲鳴が響き渡った。
そして霧島さんは雄二を受付まで引き摺って行きチケットを購入する。

「……学生二枚二回分」

「はい、学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に二回分ですね？」

そういつて係りの人はテキパキと作業していく。

すごい、この状況下でそこまで営業スマイルを貫けるなんて。

「仲のいいカップルですね」

「憧れるよね」

「いや、私にはそう見えないんだけど？」

目をキラキラさせながら言う二人とは対照的に優奈は引きつった顔をしていた。

僕も優奈と同じ意見だ。

というか、霧島さんってあんなに過激だったんだね。

映画も見終わって、僕たちは駅前の『ラ・ペディス』でクレープを食べている。

三人はさっきの映画について盛り上がってるけど、僕はおいて行かれぎみだ。

「あれ？吉井君はもう食べ終わっちゃったんですか？」

姫路さんが僕の状態に気づいて声をかけてきてくれた。
あまり会話に参加できない僕は三人より食べるペースが早く、既に
食べ終えてた。

「う、うん、おいしくて、すぐ食べ終わっちゃった。」

本当の事は言えないから、誤魔化しておいた。
クレープは本当においしかったし。

「明久って結構甘いもの好きだね？そうだ、私のも一口食べる？
おいしいよ」

少し赤くなった優奈が笑顔でフォークに刺さったクレープを差し出
してくる。

「あ、ずるい。うちも」

「吉井君、私のも食べてください」

一瞬思考が停止している間に、姫路さんと美波までクレープを差し
出してくる。

男として嬉しい状態何だけど、予想外の事態で思考が追いつかない。

『はい、あ〜ん』

「あ〜ん」

よくわからないけど、ここは欲望にまかせ口をあける。

「いけません、お姉さま！」

キンッ、キンッ、キンッ

しかし、横から飛んできた何かに全てはじかれる。これはフォーク！？

何事かと、慌てて飛んできた方角を見ると。

「ひどいです。お姉さまの甘い甘いクレープを、その口をつけたフォークごと薄汚い家畜に与えるなんて、美春許せません」

どこかで見たことある女の子が持っているフォークでこちらを指しながらこう言ってきた。

「美春が何でここにいるのよ！」

美波が驚いた様に声を上げる。

そっだ、この子Dクラス戦の時に美波に迫ってた女の子だ。

「ここは美春の家です。そして、これ以上豚が図に乗って狼藉を働かないよう、今この場で成敗します」

そう言った途端、フォークが物凄い勢いで飛んでくる。

「えーっ、僕!？」

これは、逃げなきゃまずい!

「どうして僕がこんな目に!？」

「あの子は特別だから！」

さつきから逃げ回っているけど一向に振り切れない。
途中で三人と合流して公園を走ってるけど、姫路さんと優奈は少し
つらそうだ。

「おー、明久。何をしておるのじゃ？」

と、こんな状況で秀吉と遭遇した。

呼ばれて足を止めちゃったけど、もうすぐ追っ手が来てしまう。

「秀吉、こっちに！」

そろそろ走り回るのもつらいから、秀吉も引っ張って近くの茂みに飛
び込む。

ダッダッダッダッ

「豚野郎ー！」

茂みに入ると、僕たちが来た方からものすごい足音と女の子の音が
する。

そのまま通りすぎて欲しかったんだけど、ちょうど僕たちの前で足
を止めて大声を上げる。

「どこへ行ったのです！お姉様に家畜の匂いを移そうものなら……
直ちに火炙りにしてやります！」

「ひいつ！？」

あまりにも迫力の籠った声に美波との距離をとる。

「なんでウチを避けるのよ」

「いや、火炙りって言うから」

「よくわからんが、お主らは追っ手から逃げておるのか？」

美波と小声で話していると、秀吉が僕たちの状況を確認してくる。

「そうなんだ……何か逃げ切るいい方法はないかな？せめて僕の召喚獣が使えるればいいんだけど……」

「学園を離れると、召喚システムが使えないんですよね？」

「そうじゃ。今、ちょうど演劇部の衣装をもっておる。これを着て変装するというのはどうじゃ？」

「変装……ナイスアイデアだよ秀吉」

「うーん、でも何か嫌な予感が……」

一向にここから離れない追っ手から、どう逃げるか議論していると、秀吉からよさそうな案が出た。

優奈が不安になる様な事を言うけど、他に案はないから無視して着替える。

「って、男物じゃないの？」

着替え終わってみると、ピンクの服と白いエプロンのメイド服だった。

「部員がワシ用じゃって渡しおったので、てっきり男物じゃと思っただのじゃが……」

秀吉の方を見てみると僕と同じ服を着ていた。

「秀吉用が男物なわけないじゃん！」

まったく、秀吉は自分のことを自覚するべきだよ。

「なんだかすごく可愛いんですけど（／＼／＼）」

「うん、全然違和感ないよね（／＼／＼）」

「何この敗北感（／＼／＼）」

三人ともほんのり顔を赤くして、楽しそうだ。

「困っちゃうんだけど」

「「「はう〜（／＼／＼）」「「「

そうやって、三人に抗議してると、

「見つけました！」

茂みに女の子が突っ込んできた。

「おとなしく……なんですかその格好？」

「聞かないでよ答え難いから！」

質問されて困っていると、

「不潔ですう！不純ですう！女の格好さえすればお姉様が好きになつてくれると思つたら大間違いですう！」

「いや、君が大間違い」

「ウチは普通に男の子が好きなんだから」

女の子は頭をブンブン振りながら叫ぶが、明らかに間違いだと思つ。
美波本人もそう言ってるし。

「神聖な美春達の仲を冒瀆する豚め！決して許しません！！」

そう言つて再度、右手の指一杯にフォークを構える。
鬼ごっこ再開。

ていつか、さっきより状況が悪くなってる！？

またしばらく走つたけど、やっぱり諦める様子はない。

「どうしよう、まだ追ってくるよ！」

「仕方ないわ、4本に別れて逃げましょう！」

「それって、僕だけが標的になるって意味じゃ！？」

いくらなんでそれは酷い。

「そつだ！いい考えがあります。文月学園に逃げましょう！」

今度は姫路さんが提案してくる。
でも何で学園へ？

「あ、そつか！さすが姫路さん、その手があつたね」
「それに、ここからならそんなに遠くないよ」

姫路さんの意図を理解した僕達は、文月学園へ向かった。

文月学園へ駆け込んだ僕たちは先生を探して廊下を走る。

「はあはあ……あ、いた！」

二階に上がってすぐ、現代国語担当の竹内先生を発見！
これで、助かった！

「現国じゃウチ全然戦力にならないんだけど……」

「ここは警沢を言ってる場合じゃない！」

「はあはあ……それに、四対一だから、大丈夫！」

言いながらも竹内先生に近づいて行く僕達4人。

「……竹内先生！」「……」

「はい？」

「模擬試召戦争をやりたいんですけど！」

「あ、はい。承認します！」

そう言うとすぐに承認してくれた。

これなら間に合う。

「……試^{サモン}獣召喚！」「……」

召喚を終えると同時に女の子が現れた。

危ない。本当にギリギリだった。

「ああ！酷い！！」

僕達の召喚獣を見て非難するけど、それはこっちのセリフだ！

「おのれ、私の愛を邪魔する気ですか！？サモン試獣召喚！」

『Dクラス 清水美春 VS Fクラス 島田美波
16点

現代国語 132点 VS Fクラス 姫路瑞希
345点

明久 114点 VS Fクラス 吉井

優奈 189点 『 VS Aクラス 如月

召喚と同時に女の子の召喚獣が急接近してくる。

「姫路さんの召喚獣がいれば怖い物なしだ！この勝負勝てる！！」

「ごめん瑞希。先行して！」
「わかりました！」

優奈の掛け声と同時に点数の一番高い姫路さんが先行し、次に優奈が僕と美波を守るように前にでて、姫路さんの後ろに付く。

「ごめんなさい！」
「そうはいきません！」

謝りながら姫路さんが大剣を振り下ろしたけど、彼女は振り下ろす

前に飛び上がり、姫路さんの攻撃を避けて美波を狙う。

「させない！」

「もらった！」

が、割り込んだ優奈が攻撃を止め、僕が横から急襲し、相手を弾き飛ばす。

そこに戻ってきた姫路さんが素早い動きで彼女に一太刀入れる。

当然、姫路さんの攻撃に耐えられるはずはなく、彼女の召喚獣は消え去った。

トトトトトト……

「0点になった戦死者は補習ううう！！」

召喚獣が消えると同時に、ものすごい勢いで走ってくる鉄人（西村先生）。

ずっと見てたんだらうか？

「いやあ、離して！くうう！吉井明久、覚えていなさい！！」

鉄人（西村先生）から逃げられるはずもなく、そんな捨て台詞を僕に吐いて去って行った。

「とりあえずなんとかあったね」

「あーあ、結構時間経っちゃったわね」

美波の言うとおり外はもう夕方だ。

まだ暗くなってないとは言え、そろそろ帰った方がいいだろう。

「じゃあ暗くなる前に帰ろっか」

そうして僕達は帰路についた。

Aクラスとの試召戦争から、最後まで大変な一日だったけど、有意義な一日だったとも思う。

第九話 デート（後書き）

どうだったでしょうか。

明久が少し蚊帳の外ですが男女比1：3だからこんなものかなと感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第十話 清涼祭

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものは何ですか？』

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

「Hな本・・・もとい、成人向けの写真集」

教師のコメント

訂正の意味はあるのでしょうか。

坂本雄二の答え

「自由」

教師のコメント

この回答から坂本君の必死さが伝わってくる気がします。

「優奈。勉強教えて欲しんだけどいいかな？」
「え？いいけど。急にどうしたの？」

明久と下校中、明久が急にこんなことを言ってきた。
中間、期末テストの一週間位前によく言ってくるけど、まだそんな時期じゃない。

しかも物凄く真剣な表情だし、何かあったのかも知れない。

「来週の召喚大会で優勝しないといけなくなって、少しでも点数を上げておきたいんだ」

「優勝しないといけないって？」

その言い方と雰囲気だと、優勝しないと大変なことになるみたいに聞こえる。

何事かと思つて訊くと、明久は少し沈んだ面持ちで答えてくれた。
瑞希が転校するかもしれないこと、そうならないように瑞希を含め明久達が頑張つてること、詳しくは教えてくれなかったけど学園長と取引していること。

「そんなことになってるんだ。他にも私が手伝えることはない？」

私も瑞希に転校して欲しくないから、他にも手伝えることがあるなら手伝いたい。

生徒の健康にも問題があると言うのに、交換条件を出すなんて学園長はズいぶんケチだと思う。

「うーん、今のところはないかな？何かあつたら頼むよ」

明久は少し悩んでそう答えた。

今日が締め切りだから今から召喚大会にエントリーもできない。

クラスが違う上に、召喚大会にも出ない私じゃ手伝えることも少ないけど、何もできないのはじれったい。

「じゃあ、明久が勉強に集中できるように、清涼際が終わるまで明久の家の家事引き受けるよ」

「いいの？」

「うん。私も瑞希が転校するのは嫌だから」

だから、私にできることを頑張ろう。

「三番テーブルにコーヒー二つ、シフォンケーキ二つ」

清涼祭当日、私はウエイトレスをしている、メイド服で。

何故なら私達Aクラスの出し物はメイド喫茶『ご主人様とお呼び！』だからだ。

みんな着てるとはいえこの服装は結構恥ずかしい。

反対する女子も多かったけど、男子だけじゃなく、代表の翔子も乗り気だったため、実現した。

何でも翔子は坂本を呼びよせるために賛成したとのことだ。

「お邪魔します」

声が聞こえたので比較的入口の近くにいた私が向かう。

入口には美波がいた。

もしかして、明久や瑞希も来てる？

「おかえりなさいませ、お嬢様」

ちよつと驚いたけど、顔を何とか営業スマイルにして対応する。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

「おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

美波に続いて明久と瑞希、小学生位の女の子が入ってきた。

「……」

「おかえりなさいませ、ご主人様」

三人の後に周り警戒した坂本が入って来た。

「お席にご案内します」

少し早口になりながらも五人を席に案内した。

というか、明久。恥ずかしいからそんなにじろじろ見ないで。

「こちらがメニューになります。ご注文がお決まりになりましたら
お呼びください」

席に座った五人に、凝った装丁のメニューを渡してさがる。

坂本が来ているため、約束した通り翔子にまかせる。

「そうだな。さっきいった二・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

しばらくすると、中央でこんなことを叫ぶ声が聞こえた。声のする方を見てみると、チンピラ風のモヒカンと坊主がいた。さつきも来て同じ様なことを言っていた迷惑な客だ。

二回も同じことをしているのを見ると、FクラスとAクラスに対する営業妨害だろうか？

とりあえず、少し暇をもらって明久達の所に行く。

「ねえ、明久。もしかして営業妨害を受けてる？」

「うん。おかげで客足が途絶えてこまつてるんだ」

どうやら本当に営業妨害をしているらしい。

学園祭で営業妨害なんて、どれだけ暇なんだろう？

「……雄二、これ」

明久と話していると、何故か翔子がメイド服を抱えてこっちに来た。

「翔子、そのメイド服は？」

「雄二に頼まれた」

どうやら坂本が作戦で使うみたいだ。

「おう。すまないな」

「……貸し1つ」

「だ、そうだ。明久」

「うん。ありがとう。お礼に今度1日雄二を好きにして良いよ」

「……ありがとう吉井はいい人」

「ちょっと待て！どうして俺が！」

坂本の悪あがきも虚しく、翔子は嬉しそうにこの場を去っていった。

「で、それをどうするの？」

「……もちろん着るんだ」

私が訊くと、坂本が明久をにらみながら返答する。

「だってさ、姫路さん」

「え？私が着るんですか？」

「バカを言つな。姫路が着ても攻撃できないだろうが」

「え？それじゃあ美波？でも、美波だと胸が余っちゃうとぶべらあ
っ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

素人の私でもわかる位凄い殺気を美波から感じる。

美波にとって胸は禁句みたいだ。

「島田でもない。面が割れてしまっただろうが」

「……まさか……」

明久がすごく嫌そうな顔をしている。

「着るのはお前だ」

「いやあああああ！」

雄二の楽しそうな返答に明久の絶叫が響く。

確かに女装をすれば顔はバレないだろうけど、さすがに明久が不憫なので助け舟をだすことにする。

「じゃあ、私が行こうか？」

『へ』

私がそう提案すると四人が目を丸くしてこっちをむいた。

「私じゃ痴漢の濡れ衣を着せる位しかできないけど、それでよければ」

「それで構わないが、いいのか」

私がそう言つと坂本が少し考えてから答えた。

「うん」

「明久が女装した方が面白いんだが……。仕方ない如月が叫び声を上げたら俺たちが乱入するから、頼んだぞ」

「了解。その服は戻しておくね」

坂本と簡単に打ち合わせをして、私は準備する為にいったん控室に戻る。

ついでに翔子にも手伝ってもらおう。

「ご主人様」

モップを持って、例の二人に声をかける。

「なんだ？」

「お、結構可愛いな」

そう言つて、気持ち悪い視線を向けてくる。

「ご主人様、足下を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」
「掃除？さつさとすませてくれよ？」

二人が席から立つ。

私は坊主先輩のすぐ横を通る瞬間、坊主先輩の反対側に飛び退いて、叫び声を上げる。

「キヤー！！」

そうして周りが私の方へ注意が向いてから、坊主先輩をにらみ叫び声を追加する。

「どこに触ってるんですか！！」

「ちよ、ちよつと待て。俺は何も……ぐぶあつ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「まっただくだ！」

何か言おうとする坊主先輩に明久と坂本の同時攻撃が入る。

「お、俺は何も知らない」

「さつき近づいた時、優奈のお尻を触った」

坊主先輩が往生際悪く言い逃れしようとしたところに、打ち合わせ通り翔子のとどめが入る。

これで周りから完全に痴漢したと見られたみたいで、すごく冷たい視線が先輩達に刺さる。

「さて。痴漢行為の取り調べのため、ちよつと来てもらおうか」

そう言って先輩達に近づいていく明久と坂本。

たぶん、連行して何でこんな嫌がらせをするのか、問い詰めるまじだろつ。

「くっ！行くぞ夏川！」

「くそつ！」

状況を不利と見て逃げ出すモヒカン先輩と坊主先輩。

「逃がすか！追うぞ明久！」

「了解！」

二人を追って明久と坂本も廊下に飛び出す。

「ところで雄二、ここの会計は？」

「時間がない！姫路達に建て替えてもらっつ！」

二人はそう言っつて先輩達を追撃する。

「・・・お会計は、夏目漱石を一名か、坂本雄二を一名のどちらかとなります」

「坂本雄二を一名でお願い」

「・・・ありがとうございます」

横で坂本が千円で売られてると坂本はそれでいいんだろか。

「如月さん大丈夫だった？」

「う、うん。心配してくれてありがとう」

「まったく、こんな公衆の面前で痴漢なんて信じられない」

「後で先生に言っつておいた方がいいわね」

近くにいたクラスメイト達が心配して駆け付けてくれた。

実際痴漢されてないだけに、みんなの心配そうな様子に良心の呵責を感じる。

そのあと私はみんなに大丈夫だと伝えてウエイトレスの仕事に戻った。

清涼祭はまだまだ始まったばかりだ。

第十話 清涼祭 (後書き)

どうだったでしょうか。

感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第十一話 誘拐

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ？統率力？行動力？その他（）」
また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『「？かわいらしさ」 候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『「？かわいらしさ」 候補……姫路瑞希（訂正）木下秀吉（訂正）
如月優奈（訂正）島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるようです。

坂本雄二の答え

『「その他（結婚相手）」 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

「あ、二人とも、今から準決勝？」

私は喫茶店の当番が終えて、召喚大会を見に行く途中、次の試合に出場する予定の優子と翔子に会った。

「そうよ。喫茶店の方はもういいの？」

「うん。私の担当時間が終わったから、あとは自由。それで、何で秀吉はそんなにボロボロなの？」

優子はボロボロにされた拳銃手足を縛られた秀吉を引きずってる。しかもチャイナドレスを着てるし、本当に一体何があったの？

「秀吉が私と入れ替わって召喚大会に出場しようとしてる”て、情報があつてね。なにか悪さする前に捕まえておいたのよ。まったく私まで変な目で見られるから女装するなって、いつも言ってるのに……」

明久達は優子と秀吉が入れ替わることで、3人で翔子を倒すつもりだったみたいだ。

まあ、他にも作戦があるだろうけど、明久達は勝てるのかな？

こつも簡単に作戦がバレてるのを見ると心配になる。

瑞希の転校が掛ってるから、翔子と優子には悪いけど、明久達に勝ってほしい。

「じゃ、私たちは行ってくるわね」

「……行ってくる」

「う、うん。行ったらっしやい」

頑張つてねとは言えなかったから、少し変な返答になっちゃった。
二人は特に気にした風もなく秀吉を引きずったまま会場に向かった。
二人を見送った私は観客席に向かおうと思ったところで……

ガバツ！

「っ！？むーむー！？」

突然ハンカチのようなものの口に押し付けられ、わけのわからないまま私は意識を失った。

「さてどうする？坂本と　　吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？」

「待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしからな」

「坂本つて、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが……」

「気持ちにはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けなくすることなんだから」

周りから音楽と話声が聞こえる。

うるさくて眠れない。

あれ？私は今なにしてるんだっけ？

そう思つて重い瞼をゆっくり開ける。

「……ん、うつ、ん………?」

なんだろうすごく気分が悪い、視界がぼやける。

「お、目が覚めたか……」

そうやってぼんやりしていると知らない男性の音がする。

声のする方に視界を何とか定めると、柄の悪そうな高校生位の男子が何人もいた。

よく見ると見覚えのある小学生位の女の子が怯えた様子で混じっている。

「優奈ちゃん。大丈夫ですか」

「え………?」

聞き覚えのある声のする方に顔を向けると瑞希と美波、縛られている秀吉がいた。

三人とも少し顔が強張っている。

周りを見渡すと、周りからも音楽が聞こえてきて、カラオケセットが置いてある。

かなりの広い部屋だから、多分どこかのカラオケボックスのパーティールームかな?

わからないことだらけど、ふと疑問に思ったことを瑞希に訊いてみる。

「ねえ、瑞希。一ついいかな」

「はい。なんですか?」

私が声をかけると、瑞希は真剣な表情で私と向き合う。

「なんで瑞希達はチャイナドレスなの？」

「えっと、これはFクラスの中華喫茶の制服なんです」

「そうなんだ。確かに瑞希達が着ればこれ以上ない位、客寄せになるね」

瑞希は私の質問に少し恥ずかしそうに答えてくれた。

私もAクラスでメイド服を着てたから、瑞希の気持ちはわかる。

明久は普通の中華喫茶だと言ってたけど、売上は瑞希の転校に関係するし、営業妨害もあったから明久達もなりふり構ってられなかったのかもしれない。

「この状況で他に聞くことないの！」

そうして納得していると美波の声が響いた。

私は美波にそう言われて、改めて冷静に状況を把握するように努める。

確か私は召喚大会を観に行こうとしてたはず。

なのに何故かこんな所において、瑞希達と一緒に不良みたいな人達に囲まれてる。

「もしかして私達、誘拐された？」

私は否定して欲しくて、瑞希達に訊く。

「ただ瑞希達は首を縦に振って私の質問に肯定する。」

「誘拐された」その事実気づくと同時に、恐怖が湧き上がってきた。

なんで？という疑問はあつたけど、私はどうやって逃げるか考える。うるさいカラオケボックスで叫んだところで大した効果はないけど、直接誰かに助けを求めればなんとかなるはず。

不良っぽい人達は「ヤっちゃっていいの？」などと言ってるから、早

く助けを呼ばなくちゃいけない。
そこで私は美波にこっそり話しかける。

「ねえ、美波。私が彼ら注意を引くから外に出て助けを呼んでくれない？」

「それじゃ優奈が危ないし、葉月だって」

「でも、このままじゃみんなの身が危ないし、騒ぎになれば彼らも逃げるだろうから、美波が早く助けを呼べれば大丈夫」

私がそう言つと美波は少し悩んだけど、すぐに頷いてくれた。

「あの！……何で、こんなことを？」

私は美波と距離をとって、怖いけど不良っぽい人達に話しかけた。
この質問は相手の気を引くためのものだけど、私が疑問に思ったものでもある。

「ああ？そついやお前眠つてたな。坂本と吉井を動けなくするよう依頼を受けたんだよ」

営業妨害もあつたし、明久と坂本は何か変な事に首を突っ込んでる？

「えーと……。このっ！」

「な！？」

ダッツ！

他に気を引こうと何か話そうと思つただけで何も思いつかなかつたから、近くの人に体当たりして気を引くことにした。

さっきの質問でみんな私を注目してたし、うまくいけばこれで美波

が逃げる隙を作れるかもしれない。
正直後が怖いけど、もう野となれ、山となれだ。

「逃がすか!」

「きゃっ!」

声のした方を見ると、部屋の入口の近くで美波が捕まっていた。
そんな、失敗!?

「さつき、こそこそ話してたる?だから大体予想がついてたぜ。体
当たりは予想外だったけどな」

失敗したシヨックで固まっていると、私がつつかって転んだ人がそんなことを言いなが私を押し倒してくる。

「え、いやっ!」

「ちよつとおいたがすぎんじゃね?」

私は必死にもがくけど軽く抑え込まれてしまう。
周りが一気に騒がしくなったけど、私は全く気にする余裕はなかった。

「おら!抵抗すんじゃねえよ!」

「ひっ!」

怒鳴られて身を縮めると、私の制服に手をかけようとしてくる。
これから起こる未来に私は身を震せて、目を閉じ、恐怖で頭によぎった相手の名前を無意識に叫んだ。

「明久!」

バン！！

「おじやましまーす」

するといきなりドアを強く開ける音がして、続いて明久の声が聞こえた。

「ハア？お前誰よ？」

私を押し倒してきた人は興がそがれた様に私からのいて明久に近づく。

「死にくされやあつ！」

近づいていった人に明久は股間を思い切り蹴りあげた。

「ほごあああつ！」

蹴られた人は断末魔とともに白眼を剥いて失神した。

そのあと坂本が乱入してきたり、女の子を人質にしようとした人が土屋君に気絶させられたりして、全員気絶したり逃げ出して行った。明久が呆然としていた私にゆっくり近づいてきて心配そうに声をかけてくれた。

「優奈。大丈夫？」

そういえば明久は私が困ってたときはいつもこう言って助けてくれたっけ。

「明久！」

私は明久に抱きついた。
押し倒された本当にもうダメかと思ったし、怖かった。

「もう大丈夫だから」

明久はしっかりと抱き止めて慰めるようにそう言った。

明久の腕の中はすごく安心できて、ずっとこうしていたいと感じる。
今回のことで自覚した。

私は明久のことが好きなんだ。

だから瑞希や美波と仲良くしてるもやもやっとするし、襲われた時に明久のことが頭に浮かんだんだと思う。

第十一話 誘拐（後書き）

展開、特に最後の方が強引だった気がするのですが、どうだったでしょうが。

感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第十二話 決勝戦

問 以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい

「塩化アンモニウムを使ってアンモニアを生成する場合、もう一つ用いられる材料は（ ）である」

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。弱酸、弱塩基遊離はよく出題されるので、この機に酸や塩基の強さを確認しておくといいかもしれませんね

土屋康太の答え

『塩化吸収材』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように

如月優奈の答え

『資金』

教師のコメント

それは材料や器具をそろえるために用いるものです

〈明久side AM6:30〉

「ふあゝあ」

僕は欠伸をしながら学校に行く準備をしている。

何故僕がこんなに朝早く学校に行く準備をしているかというと、今日の決勝戦に備えて朝一番でテストを受けるためだ。

でも勉強でここのところあまり寝ていない上に、昨夜は徹夜だったから眠い。

ピンポン

準備も終えて、朝食を作ろうと考えていたところにチャイムが鳴った。

たぶん優奈だ。

昨日のこともあったので、登校時刻が早くなるけど今日も一緒に登校する約束をしたから。

「はい」

僕は返事をしながら、急いで鍵と扉を開ける。

「お、おはよう。明久」

「うん。おはよう」

扉を開けると少し驚いた表情をした優奈がいた。

僕も挨拶を返しながら、何故優奈が驚いてのか首をかしげると。

「チャイムの音で起きることはあっても、明久がこうやって出てき

たことはなかったから」

「そ、そんなことないと思うよ。たまたま早起きした時とか、何度かあったよ」

僕が疑問に思ってること察して何故驚いてるか答えてくれた。

「そうだったけ？」

「そうだよ。それはそうと、まだ早いから上がってよ」

「じゃあ、おじゃましまーす」

少し茶化すような優奈の言葉を受け流して、部屋に上がるように勧める。

今、話した感じではいつも通りだけど、暴行未遂なんて怖い目に遭ったんだ。

ショックを受けてないか心配だ。

「明久」

「ん。どうしたの？」

部屋に入ってリビングに向かう途中、優奈に呼びとめられた。

僕は急になんだらうと思っつて優奈の方を向いた。

「昨日、あの後ごたごたしてて、しっかり言えなかったから、……助けてくれてありがとう」

優奈は自然ないつもの笑みを浮かべて、改めてそうお礼を言った。昨日のことを気にしてる様子はないし、そうやって自然に笑えるなら心に大きな傷を負ったと言っつことはないだろう。

「どういたしまして！」

優奈が大丈夫な事が嬉しくて、僕は笑顔でそう返した。

side out

優奈 side

「さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！」

私は今翔子達、瑞希達と一緒に召喚大会の決勝戦を観に来てる。

決勝戦は明久達と常夏先輩（明久談）の試合だ。

対戦科目は日本史で明久はもともと得意な上に今回、重点的に勉強してるから大丈夫だろう。

坂本は試召戦争のことがあるから、驚くほど点数を伸ばしてるって話だけど正直不安だ。

明久は対戦表が発表される前から妙に日本史を重点的に勉強してたけど、もしかして知ってた？

「出場選手の入場です。二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じく二年Fクラス所属・吉井明久君です！皆様、拍手でお迎えください！」

その言葉とともに盛大な拍手が二人を迎えた。

「なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、二年生

の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

瑞希の父親が観に来てるらしいから、これらなFクラスに良い印象を与えられるかもしれない。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じく三年Aクラス所属・常村勇作です！皆様、こちらも拍手でお迎えください！』

コールを受けて、昨日私達のクラスに来ていたモヒカンと坊主の先輩が姿を現した。

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきつちりと決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

拍手を受けながら、先輩達はゆっくり明久達の前にやって来た。そして四人ともアナウンスで流れるルール説明を無視して、何か話し始めた。

声が大きくない上にアナウンスの音で何を話してるか全然わからない。

『それでは試合に入りましょう。選手の皆さん、どうぞー！』

アナウンスの説明が終わり、審判役の先生が四人の間に立つ。そこで四人は話しをやめて、召喚獣呼びだす。

「「「「「
試^{サモン}獣召喚「「「「」

『3 - Aクラス 常村勇作&夏川俊平 日本史 209点&197点

VS

『点
2 - Fクラス 坂本雄二&吉井明久 日本史 220点&201

点数が表示されたディスプレイを見て、先輩達の余裕そうな顔が消えた。

本当に坂本はいつの間にあんなに点数を!?

とても試召戦争の時、小学生レベルの日本史で53点を取った人物とは思えない。

「アンタらは小細工なしの実力勝負でブツ倒してやる!!」

明久の気合いの入った掛け声とともに召喚獣達が動き出した。

「一体何が？」

始め明久が一方的に攻めてたんだけど、坊主先輩の召喚獣が大きく距離をとり剣を腰ために構え出した。

何をするのかと思つてそつちに目を向けてたら、気付いた時には明久が目を押さえてた。

その隙に先輩は召喚獣を突撃させ明久の召喚獣のわき腹を切り裂く。明久の様子がおかしかったから、目を離している間に何かあったんだろう。

瑞希達の方を見たけど、瑞希達も私と同じで何が起きたかわからないみたいだ。

その間にも戦いは進んでいく。

「明久っ！てめえ根性みせろやっ！」

坂本がまた一撃をもらいふらついた明久を一喝する。その声を聞いてか、明久は踏み止まった。

「……………当然っ！」

明久は坊主先輩の召喚獣を睨みつけたままそう声を上げた。その後、突撃してきた先輩の召喚獣をいなして蹴り飛ばす。

そして明久はモヒカン先輩の召喚獣の方に向き、木刀を投げつけた。木刀がモヒカン先輩の剣の軌道を変えて、突撃してきた坂本の召喚獣が渾身の一撃をたたき込む。

これでモヒカン先輩の召喚獣は戦闘不能だ。その間に蹴り飛ばされた先輩の召喚獣が明久の召喚獣に向かってくる。

明久の召喚獣も弱ってるけど、先輩の召喚獣も最初の連撃と蹴りでかなり弱ってるみたいで、開始の時より動きが遅い。

明久は先輩の攻撃をかわし、頭突きで牽制し、距離をとる。

「明久っ！」

「待ってました！」

坂本の呼び声とともに、明久の召喚獣の方へ地面を木刀が転がってきた。

明久はそれを受け取り、先輩の召喚獣に向かって召喚獣を走らせる。

「くそおおっ！お前ら如きに三年の俺が

！」

「くたばれええっ！」

二人の叫び声とともに互いの召喚獣がぶつかる。

先輩の剣は明久の召喚獣の左腕を少し切り裂いたが、明久の木刀は相手の喉に突き立っていた。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

オオオオオ!!

「やった!」

一瞬の沈黙の後、勝利宣言がなされ、あっちこっちから歓声が上がる。

私も嬉しくて思わず声を上げる。

瑞希達も嬉しそうだ。

これなら瑞希の転校の件も何とかなるかな?

瑞希のことは嬉しいけど、明久がここまで無茶した理由が、瑞希のためだと思いつくと少し複雑だ。

本当はこんな風に思っちゃいけないのに。

その後、私と翔子達は当番のためすぐに喫茶店に戻ることになった。

第十二話 決勝戦（後書き）

次で清涼祭編は終了です。

感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第十三話 事後

問 以下の問いに答えなさい

「braveの対義語を英語で答えなさい」

姫路瑞樹の答え

『timid』

教師のコメント

その通りです。braveは一般的に勇敢なという意味ですから、臆病なという意味のtimidや気の弱いという意味のfaintなどが対義語にあたります。姫路さんには簡単でしたね

土屋康太の答え

『evorb』

教師のコメント

反対に書いても対義語になりませんよ

如月優奈の答え

『chicken』

教師のコメント

確かにその通りですが、テストの回答でスラングは正解にできません

「明久、何してるの？」

私がFクラスにくると明久が秀吉を掴んでどこか行かせまいとしていた。

「ちょ、ちょとね。それより優奈はここにいて大丈夫なの？」

明久が誤魔化すように話題を変えてきた。

何か怪しいけど、言いたくないなら別にいいかな。

周囲は清涼際の一般公開が終了し撤収作業に入ってるから、その疑問も当然だしね。

「Aクラスはあまり仕事がなかった男子を中心に撤収作業をしているから、私はあまり仕事がないの」

「そうなんだ。じゃあ優奈はなんでここに」

明久は納得すると、私が訪ねてきた理由を訊いてきた。

「いくつがあるんだけど。まず優勝おめでとう。かっこよかったよ」

「そ、そうかな？」

私がそう言うと、明久は照れたように目をそらしてそう返した。

「それと坂本と土屋君、昨日は助けてくれてありがとう」

ちょうどいた、坂本と土屋君にも昨日のお礼を言う。

「気にするな。そつだ如月も来るか？迷惑をかけた元凶の顔をくらい見ておきたいだろ」

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

そう言つて案内された場所は学園長室だった。
昨日の事件の元凶つて学園長？

「お主ら、全く敬意を払つておらん気がするのじゃが……」
「そう？きちんとノックして挨拶したけど？」

明久が諦めたように言う秀吉になんの悪気もなく答える。
普通ノックしたら中からの返事を待つものなんだけどね。

「あたしは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

そう思つていると学園長から明久に注意が来た。

「あ、学園長。優勝の報告にきました」

「言われなくてもわかつてるよ。アンタ達に賞状渡したのは誰だと思つてるんだい」

明久は注意されたのに気にしたふうもなく学園長に優勝の報告をする。

学園長はそんな明久にめんどくさそうに答えた。

私は授賞式を観れなかったけど、今の話だと学園長が賞状と景品を渡したみたいだ。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

明久と坂本の後ろにいる私達を見て明久達をとがめるように言い捨てる。

坂本に誘われてきたけど何かまずかったのかな？

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔をくらい拜んでおいてもばちは当たらないはずだ。特に秀吉と如月は昨日、誘拐された内の二人だしな」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

坂本の言葉につまらなそうに鼻を鳴らした。

「あの、学園長は昨日の事とどんな関係があったんですか？」

今のやりとりだと、やっぱり学園長は昨日のことに関わってたみたいだ。

私は事情を聞くために学園長に質問した。

「はあ、あんまり言いたかないんだけどね。景品の腕輪に不具合があったね。極力お披露目なしに回収するわけにもいかなかったんで、腕輪の不具合が起きないそのガキどもに協力してもらったんだよ。そして私の失脚を狙って、学園の醜聞を広めようとした教頭がガキどもの邪魔をするためにあんなことをしでかしたというわけさね」

学園長は責任を感じてるのか、私の質問に嫌そうな顔をしながらも答えてくれた。

でも今の話って……

「学園の醜聞を広めるって、この学園にとって危険な話ですよね？」
「そうさね、一歩間違えばこの学園の存続に関わる話だし」

腕輪の不具合がなにかわからないけど、腕輪の性能から召喚獣に関わることだと思う。

文月学園は試召戦争と試験召喚システムを用いた特異な教育方針と制度を導入した試験校だ。

試験校だから世論に弱い、特に試験召喚システムに関する醜聞はこの学校の根本を揺らがしかねない。

学園長の話聞くに、本当に危なかったみたいだ。

「それで、腕輪は返却した方が良いですか？」

「いや、それは後で良いさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「そう言えば、どうしてあいつら俺達がババアと繋がっている事を知っていたんだ？」

学園長と明久が話してる間、坂本が何かブツブツいつてる。

何か考え込むような仕草だけど何かあったのかな？

「それじゃ学園長。これをゲットするっていう取引は成立しましたので、教室の改修をお願い」

「待て明久！ その話はまずい！」

学園長と明久が取引らしき話しをしていると、いきなり坂本が真剣な顔で怒鳴りだした。

「……………盗聴の気配」

「やられたか！」

土屋君の言葉を受けて、坂本が学園長室の扉を乱暴に開け放つ。

すると複数の足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

「あいつら……追うぞ明久！」

「ちよっ……どういう事!？」

「常夏コンビが、学園長室を盗聴してやがったんだ!今の会話が録音されていたらマズい！」

「なんだって!？」

確かに今の会話が公開されたら、学園の信用は失墜して、この学園の存続が怪しくなる。

「急げ！」

「わかった!秀吉とムツツリー二も協力して!優奈は危ないから教室に！」

「うむ！」

「……………(コクリ)」

そう言つて四人揃つて学園長室を飛び出す。

私も手伝いたいけど、私は四人についていけない体力もなく、単独で動いても相手に返り討ちにあつてしまう。

昨日のこともあるから、私は諦めて自分のクラスに戻って片づけを手伝うことにした。

P r r r r r !

外の片づけのために廊下に出ると、携帯の着信音があった。

画面を見ると明久からだ。

「もしもし？」

『優奈？今どこにいる？』

「Aクラスの前だよ」

せっぱ詰まった明久の声に不安になりながらも応答する。

『新校舎の屋上に常夏コンビがいるんだけど、なんとか取り押さえられない！？』

私がいるところから屋上までは歩いて三分とかからない。でも私一人で取り押さえられるとも思えない。

どうにかならないかと思つて周りを見ると、ちょうど西村先生が見つかった。

「西村先生がいるから、何とか引つ張つて屋上に急ぐよ」

私は明久にそう言つて電話を切つた。

「先生！学園の存続に関わるかもしれないんです。ちょっと着いてきてください」

「なんだ！」

驚く西村先生の答えを聞く前に引つ張つてすぐ近くの階段を駆け上がる。

詳しくはわからないけど明久の声からするに、時間の余裕はあまりないはずだ。

「はあ、はあ……」

屋上の扉の近くまで来た。

二階分の階段を上っただけなのに思ったよりもつらい。

「夏川、そっちの準備は大丈夫か？」

「大丈夫だ。へへっ、これが流れりゃ俺達の逆転勝利だな！」

「そうだな。これで教頭の取引も成立する。これで受験勉強からおさらばだ」

扉の向こうから常夏コンビの声が聞こえる。

「なるほど、学園長が言っていた件か。如月もう戻ってなさい。後はこっちで何とかする」

「は、はい」

西村先生はそう言って物凄い勢いで最後の階段を駆けて行った。どうやら学園長は他の先生にも手を回していたみたいだ。

「お前ら、ここでなにやっとするか！」

「「げえっ、鉄人！」」

私は、何処からか銅鑼の音が聞こえてきそうな悲鳴を耳にしつつ、明久に任務完了の連絡をした。

後から知ったことだけど、二人の先輩は教頭先生から依頼されたことを全て話したらしい。

その結果、今度教頭室にガサ入れが始まるとのことだ。

今年の清涼際は色々大変だったけど、結果的に全てうまくいったようでよかった。

第十三話 事後（後書き）

原作でも学園長は鉄人に何か手を回してたような描写があったので
こういう形にしてみたのですが、どうだったでしょうか。
感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

第十四話 如月ハイランド（前書き）

今回は長めです。

第十四話 如月ハイランド

問 以下の問いに答えなさい

『日本の民法における結婚適齢は何歳か答えなさい』

姫路瑞希の答え

『男性は18歳、女性は16歳』

教師のコメント

正解です。2009年の法制審議会で、男女共に18歳に統一すべきたとの最終答申が報告されており、政府方針として改正する方向のようです。

改正されると、姫路さんの結婚できる日が先延ばしになってしまうかもしれませんね。

吉井明久の答え

『愛があれば歳の差は関係ありませんよ』

教師のコメント

夢と希望をありがとうございます。

如月優奈の答え

『愛があれば、歳の差は関係ありません』

教師のコメント

流石、幼馴染ですね。息がぴったりです。

清水美春の答え

『愛があれば、年齢も性別も関係ありません』

教師のコメント

いえ。性別は気にしましょう。

「き、り、し、ま、さ〜ん」

翔子、優子、愛子と談笑していると明久がAクラスに翔子呼びながら意気揚々と入ってきた。

私や翔子がFクラスに遊びに行くことはあったけど、明久がAクラスに来るのは初めてだ。

その上、翔子に用とは一体なんだろう？

「あれ？どうしたの吉井君？なるほどわかった。ベッドにでも誘いに来たのかな？」

「やだな、工藤さん。僕がそんな不純な動機でわざわざAクラスに乗り込んでくるわけないじゃない」

翔子が返事をする前に、愛子が明久をからかうように声をかける。

明久はそんな愛子の言葉を鼻血まみれになりながら否定する。

不純な動機で来たわけじゃないだろうけど、一体何を想像したのよ。

「愛子。明久をからかわないですよ。それで、翔子に用事みただけど、どうしたの？」

私は愛子を少し覗みながら窺め、明久に用事を訊く。

「うん。これを霧島さんにこれをあげようと思って。はい、雄二と行って来るといいよ」

そう言っつて明久が取り出したのは如月ハイランドのプレミアチケットだ。

つて翔子にあげちゃうの!?

「明久は誰も誘わないの?」

「うん。僕には一緒に行つてくれる人なんていないし」

明久があっけらかんと答えた。

今の反応だと、明久が持つてる理由は誰か一緒に行きたい人がいるからじゃなくて、翔子から逃げてる坂本に押しつけられただけみたいだ。

明久がそれを持っていたのは知ってたから、もしかしたら誘つてくれるのかな?と少し期待したんだけど、そんなことはなかった。

そうじゃなくても誰か誘えば、誰に気があるかわかるかもしれないなつたのに。

「優奈。しょんぼりしだして、どうしたの?」

「あははは、なんでもないよ?」

心配そうに訊いて来る明久に、私は笑つて誤魔化す。
顔にでてた?

「でも、これで代表の望みは叶うわね」

「よかったね、代表」

「ありがとう。吉井」

翔子は嬉しそうに明久にお礼を言う。

「どういたしまして。じゃあ、そろそろ授業だから僕は戻るね」

明久はそう言っつてAクラスを出て行った。

「代表がデートね！。なんか想像できないや」

愛子は翔子が坂本と一緒にいるところほとんど見てないし、翔子が坂本以外男子と一緒にいることないから、そう言っつのも無理ない。

「そっつえば優奈は、代表と坂本君がデートしてる時に鉢合わせしたことあるんだっつたよね？吉井君と一緒に。どうだっつた？」

「み、瑞希と美波も一緒だよ。いや、どうだっつたと言われても……」

愛子がニヤニヤしながら私に話しを振っつてくる。

「どうか、どうして知っつてるの！」

四人で遊びに行っつた時の事を思い出すけど、今思い出すと色々恥ずかしい。

「え〜と。正直、恋人同士には見えなかつつたかも」

「一体、どうっついう状況だっつたの？」

鎖っつきの手枷をはめられた坂本と、その鎖を引っつ張る翔子を思い出す。

たぶん、逃げようとする坂本を翔子が逃がさまいとした結果、ああなっつたんだと思っつう。

そっつう思っつて微妙な顔をする私に優子が訊いてくるけど、答えずらいので目をそらして聞かなかつたことにした。

「……そうだった？」

翔子は翔子で私の言葉に不思議そうに首をかしげる。瑞希や美波もだけど、どうしたらあの状況で恋人同士に見えるんだろうか？

「……じゃあ、優奈はどうしたら恋人同士に見える？」

そう言われると答えにくい。

カップルを見ることはあまりないし、少し悩んでぱっと思いついたことを言う。

「手を繋いだりとか？腕を組むとか？」

「うわぁー、ベタだねー」

そうやって話していると、先生が来たため慌てて全員席に戻ることになった。

とある休日の昼、私は如月ハイランドで給仕服を着て仕事の確認をしている。

昨日、明久に翔子と坂本の仲を応援するために手伝って欲しいと言われてからだ。

私以外に明久、瑞希、美波、土屋君も如月ハイランドのスタッフにまぎれてサポートしてる。

今更だけど、自分のこともままならない私が他人の恋愛を応援するのも変な話だ。

確認が一通り済み、翔子達を待っていると、連絡通りすぐに翔子達が会場に入ってきて来た。

「いらっしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

私はそう言っつて二人を予定通りのステージに近いテーブルに案内する。

「はあ、如月。給仕の真似事か？」

会場を歩いている最中に坂本が呆れたように訊いてくる。

まあ、顔を隠してるわけじゃないからすぐわかるよね。

私が二人に話しかけた時、翔子も驚いてたし。

「ただのアルバイトだよ」

何企んでんだ、と言わんばかりに不審な目を向けて来る坂本に顔を向けないまま答える。

優子や優子曰く、優奈は自分が思っているより、ポーカーフェイスが下手とのことだ。

逃げられる可能性があるから、気取られないように坂本にあまり顔を向けないようにする。

「こちらの席になります」

テーブルの前まで来たので二人へ席に着くように促す。

「お客様は未成年とのことなので、こちらををご用意させて頂きました」

二人が席に着いたので、グラスにノンアルコールのシャンパンを注ぐ。

教えられたように、ラベルを見えるようにもつ。

「オードブルでございます」

私がグラスをおくと、すかさず料理が運ばれてくる。

運ばれてくる料理をナイフとフォークを使い慣れた手付きで食べる翔子と様にならない坂本のギャップが少しおかしかった。

そして二人がデザートを食べ終えて一息ついた時。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

会場に如月ハイランドのマスコットに扮した明久の声が響く。

それと同時に私は舞台裏に引込む。

私は二人、主に坂本が緊張しすぎないように配置された役なので、二人の食事が終わればこの役目もおわる。

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃるのです！》

あ、坂本が水を吹き出した。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ〜！》

ボタンと出入り口を封鎖する音が聞こえた。

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

坂本はまだ18歳になってないから無理だけどね。

《それでは、坂本雄二さん&霧島翔子さん！前方のステージへとお進み下さい！》

スタッフに誘導され、2人が壇上に入り、クイズの解答席へと案内された。

私と土屋君は仕事がないので、クイズの間ステージの脇で他のスタッフと一緒に何かあるまで待機。

瑞希と美波はマスコットキャラに扮してるためステージの上にいる。

《それでは【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズを始めます！》

二人とも凄い真剣な表情になる。

翔子はウエディング体験を楽しみにしてるからだろうけど、坂本まで？

《では、第1問！坂本雄二さんと霧島翔子さんの結婚記念日はいつ

でしょうかっ?》

いや、二人はまだ結婚してないよね?

この問題考えた人は何を考えているんだろう?

ーピンポーン!

翔子がボタンを押した。

《はいつ! 答えをどうぞっ!》

翔子は一体なんて答えるんだろうか?

「・・・毎日が記念日」

「やめてくれ翔子! 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

《お見事! 正解です!》

出来レースになる事は聞いてたけど、こんな答えでも正解なんだ。

《第2問! お2人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか?》

ーピンポーン!

今度は坂本がボタンを押した。

《はいつ! 答えをどうぞっ!》

「鯖の味噌煮!」

《正解ですっ!》

「なにいつ!?!」

これも正解!?!

《お2人の拳式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です!》

「待ていつ!絶対その別名はこの場で命名したたる!強引にも程があるぞ!」

それは私も同感。

それはそうと、坂本が気合いが入ってたのはわざと間違えるためだったみたいだ。

そこまで翔子とのウエディング体験が嫌?

《第3問!お2人の出会いはどこでしょうかつ?》

「・・・させない」

ブスッ

坂本の意図がわかった翔子が、ボタンを押そうとする坂本に目つぶしをした。

ーピンポーン!

《はい、解答をどうぞ!》

「・・・小学校」

《正解です!お2人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです!》

わざと間違えようとする坂本に腹が立つのはわかるけど目つぶしはやりすぎのような……

《第4問参ります!》

ーピンポーン！

問題が読み上げられる前に坂本がボタンを押した。
なんのつもりだろ？

「わかりません！」

どうやら問題を無視したみたいだ。

そこまでする！？

私は少し腹がたったため、近くのスタッフが持っていたマイクを借りて明久をフォローする。

《正解です！》

「な、何い！？」

《第四問は近江屋事件の実行犯は誰か？です。京都見廻組説や新選組犯行説などがありますが、どの説もそれらを裏付ける史料はいまだ発見されていません。》

問題を聞かずに答えるなら、問題を答えに合わせればいいだけだ。

《それでは最終問題です！》

『ちよつとおかしくな〜い？アタシらも結婚する予定なのにどうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

最終問題に入ろうとした時、不意にそんな声が会場内に響いた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうかー』

『ああつ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちオキヤクサマだぞコルアー！』

チンピラ風の男が止めに入ったスタッフに絡む。

言ってる内容が無茶苦茶だ。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

『で、ですがー』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの2人に問題出すから、答えられたらあの2人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

『そ、そんなー』

慌てるスタッフをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクを1つひったくっていく。

『じゃあ、問題だ。ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

「……………」

あまりにも凄まじい問題に会場が一瞬で氷つく。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

分からないと言われれば分からないけど、私が知ってる限りではヨーロッパがいままで一度も国というカゴテリーに所属したことはないはずだ。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウエディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？オレたちの勝ちじゃねえかコルアー！』

『マジありえない！？この司会バカなんじゃないの！？』

明久はカップルを無視して司会を進行する。

カップルがぎゃあぎゃああと騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りていく。

マジありえないと言ってるけど、それはこっちのセリフだ。

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

アナウンスにより、園内全てに響くかという位拍手が響き渡った。

「ふう、ここまでくれば一安心だね」

着ぐるみを脱いだ明久が安堵のため息をつく。

私達、潜入組は舞台が見える位置で一休みしてる。

「そうですね。これが終わればイベントは全て終わります」

「そうだね。それにしても坂本はクイズの時、どうしてあんなに必死だったのかな？」

あくまでも体験なんだから、あそこまで嫌がらなくてもいいのに。

<……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願いします>

「これ、アタシらのことってんの？」

「違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ？」

「だよね〜っ」

「ま、俺達の事だとしても気にすんなよ。要は俺達の気分が良いか悪いかってのが問題だろ？ な、コレ重要じゃない？」

「うんうん！ リュータ、イイコト言うね！」

イベントが進行する中、またクイズの時のカップルが騒いでいた。

「主催側は宣伝目的でやってるから、あれだけ騒ぐ人達だと手を出せないんだろっね」

「そうだね。式がブチ壊しにならなきゃいいけど」

「……………（コクコク）」

「全く、あれじゃ殆ど営業妨害じゃない」

「どうしてあんな迷惑な事をするんでしょう？」

私達は計画がめちゃくちゃにされる事を懸念しつつも、何もできない事に若干腹を立てていた。

<……………それでは、いよいよ新婦のご登場です>

気を取り直すかのように音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、会場の電気が消えた。

スモークが足元から放出され、雰囲気が高まってく。

<本イベントの主演、霧島翔子さんです！>

アナウンスと同時に行く筋ものスポットライトが、壇上の一点つまり、純白のドレスに身を包んだ翔子がそこにいた。

「……………綺麗」

誰ともわからないセリフが漏れ、静かな会場に響き渡る。ゆっくりと翔子が坂本のもとに歩み寄るのを、静かに会場中が注目する。

「……雄二」

「翔子、か？」

「……うん」

坂本の口から、言わずもがなな質問が出て来たその姿に見惚れて、動揺しているみたいだ。

「……どう……？ 私、お嫁さんに、見えるかな……？」

「……ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

「……雄二」

「お、おい。翔子……？」

「……嬉しい……」

翔子はそれ以上言葉を発することなく、静かに震えだした。

<ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますか？>

その様子を見て、仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る。

「お、おい。どうした……？」

観客から静寂の代わりに、ざわめきが生まれ始める。

そんな中、彼女は小さな、しかしはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと……夢だったから……」
<夢、ですか？>

「……小さなころからずっと……夢だった……私と雄二、二人で結婚式を挙げる事……私が雄二のお嫁さんになること……私1人だけじゃ、絶対かなわない、小さなころからの私の夢……」

口数の少ない女性が、ぼつぼつと懸命に紡ぐ言葉。

それに込められている強い感情は、誰よりも坂本が良く理解している筈だ。

「……だから……本当に嬉しい……他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこからは言葉にすることができずに、彼女はまた静かに泣き始める。

会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえ始め、神聖な雰囲気
に包まれていく。

「翔子。良かったね」

「うん。雄二もここまできたら、ビシッと決めるべきだね」

「……………(コクコク)」

「そうよね……もしあれが、アキとウチだったら……」

「そうですね……もし、私と明久君だったら……」

バックに控える私も少し涙がでてきた。

<どうぞやら、嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のように
です……さて、花婿である坂本雄二さん。お応えをどうぞ>

坂本の返答を待つために、会場が固唾をのんで見守り始める。

「翔子、俺は……」

「あーあ、つまんなーい！ マジつまないこのイベントお〜。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い？」

「だよな〜。お前らの事なんかどうでもいいっての！」

そこへ、場の空気を読まない罵倒が投げかけられた。

「ってか、お嫁さんが夢ですっ、って。オマエいくつだよ？ なに？ キャラ作り？ ここのスタッフの脚本？ バカみてえ。ぶつちやけキモいんだよ！」

「純愛ごっこでもやってんの？ そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお〜。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ ギャグにしか思えないんだケドお〜！」

口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める二人組。

また、この二人組！

「んだとテメエらっ！ もういつペン言って見やがれ！！」

「あ、明久君！ 落ち着いてっ！ ステージが中止になっちゃんます！！」

そう思うと同時に、横から明久の怒声と瑞希の慌てた声が聞こえた。そっちを向くと、今にも殴り込みをかけようとしてる明久とそれを止める瑞希達がいた。

瑞希の言うとおり、ここで殴り込めばステージが中止になる。

雰囲気がブチ壊されたけど、ここはあの二人を無視してステージを進行するべきだと思う。

殴り込むのはイベントが終わってからでもいいはずだ。

<は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですか？>

翔子の方に目を戻すと、ブーケとヴェールだけがそこにあった。

花嫁のいなくなったステージは中止。

スタッフ総出で翔子を探してるけど見つからない。

「明久、どうだった!？」

「ダメだ、見つからない」

私が建物の外に出ると、明久と鉢合わせた。

ここまで見つからないとなると、翔子は建物の外に出たんだろう。

「ちょっと、そこまでツラあ貸せや!」

明久と外を探すにしてもどうすればいいか話していると、聞き覚えのある怒声が聞こえた。

「私達の出る幕はもうないかな？」

「それじゃ、後は雄二にまかせようか」

「そうだね。皆にもう帰るって伝えないと」

休み明けの学校で翔子は落ち込んでいるところか、何処となく機嫌が好さそうに見えた。

私にはあの後何があったか知らないけど、多分一人の仲は進展した
んだろうなと感じた。

第十四話 如月ハイランド（後書き）

どうだったでしょうか。

感想、評価、アドバイスなどもあればぜひお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099p/>

バカと幼馴染と恋物語？

2011年7月28日10時37分発行